

教職大学院 Newsletter No. 150

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

公開版 2021.8.2

福井大学教育学部附属特別支援学校の取り組み

福井大学教育学部附属特別支援学校 校長 吉田弥恵子

はじめに

これまで、本校の管理職は、校長は福井大学教育学部の教授が、副校長は福井市教育委員会人事で新採用校長が、教頭も同様に新採用教頭が、という形で構成されてきました。しかし、福井大学の新たな組織改革と研究プロジェクトの立ち上げに伴い、今年度から副校長職が無くなり、校長職は特別支援教育の専門家を一般公募で採用するという形に改められました。そして、深いご縁で、今年4月から、私が本校の校長として着任しました。

私と本校との出会いは、昭和55年4月に始まります。私は、福井大学卒業後、本校で新採用教員として教員のスタートを切り、18年間勤務する中で、本校の業務を通して教員として鍛えられました。その後、定年退職するまで福井県の特別支援教育に懸命に取り組むことができたのは、本校での教員生活があったからこそと感謝しています。そして再び、

本校の校長として、附属学園と教職大学院の協働による、新たな特別支援教育の研究に携われることに、この上ない幸せを感じています。

・附属特別支援学校の紹介

福井大学教育学部附属特別支援学校は、附属小学校・中学校の特殊学級(知的障害児)を前身として昭和46年に設置され、今年(2021年)4月に創立50年を迎えました。福井県内では最も古い知的障害児の特別支援学校です。

福井大学には、附属学園として幼稚園、義務学校前期課程、義務学校後期課程、特別支援学校があり、特別支援学校は他の3校園とは別に、西に3km程離れたところに構えています。

本校の西側には県立武道館、東側には福井市藤島中学校があり、周辺には区画整理された広い水田が広がっています。今の季節は、水田の稲苗が緑色に冴えわたり、日が沈む頃から声高らかに蛙の合唱が始まるといった、豊かな自然に恵まれた環境の中にあります。

校門をくぐると、左手には一面芝生に覆われたグラウンド、右手には高さ5メートル程の松の木や枝振りのよい木々がそびえ立つ「ふようの森」があります。そして、本校の校舎正面には虹色の鮮やかな壁画「平和の楽園」が描かれています。この壁画は、本校の初代校長である香室昭圓氏が、虹の画家であるアイオー(曖囀)に原画デザインを依頼して昭和50年3月に完成したものです。障害のある子ども達が学ぶ本校が、アイオーの描いた虹色の「平

内容

- 巻頭言 (1)
- スタッフ自己紹介 (3)
- 院生自己紹介 (5)
- ミドルリーダー・マネジメントコース便り (14)
- インターンシップ・週間カンファレンス報告 (19)
- 合同カンファレンス・ラウンドテーブル報告 (21)
- ニュースレター150号特別企画 (29)

和の楽園」のようにありたいという願いが込められている気がします。

・知的障害児の特性をとらえた指導・・・「生活教育」

本校では、知的障害のある子どもの特性をとらえた指導として、子ども達が学校の中で自立的、主体的に取り組むことができるような生活の場を保障する実践を行っています。それを『生活教育』と呼んでいます。『生活教育』とは、教育の目的、内容、方法を実際の子ども達の生活の中に求めるもので、実際の生活で活かすことができる力を培うことを目的とします。そして、その内容は実生活で行われることを中心に扱い、それを実際の生活で行われるような方法で進めています。

小学部では、身近な遊びや日常生活の中での学びを、中学部では、教師や友達とともに手作りしていく身近な生活からの学びを、高等部では、就労生活をイメージし、仕事を生活の中心にした学びを大切にしています。発達が未分化な子ども達にとって、より身近な生活からの気づきが一番の学びや学び合いを生みます。生活を教師と一緒につくり上げることで、子ども自身がやりがいや必要感をもって、また友達や教師とのつながりをもって主体的に活動すると考えます。

このように生活をつくり上げるプロセスが授業であり、このような授業を通して子ども達は知識・技能だけでなく、新学習指導要領で大切にされる3つの資質・能力を培うと考えています。そして、本校では、新学習指導要領に示された新しい時代に向けた3つの観点、「何ができるようになるか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶか」を意識した授業づくりを大切にしながら、子どもの変容を丁寧に追い、記録と授業改善を進めています。

令和元年度、2年度には、子ども達が「わかる・できる」を実感し、楽しさや喜びにつながる『運動』の授業づくりに取り組みました。今年度は、研究テーマを「一人一人の学びが深まるカリキュラ

ム・マネジメント」とし、4年計画の研究に取り組んでいます。

先日、5月26日に行った『事前研究会』の公開授業や研究協議には、福井大学の特別支援教育の先生方はもちろんのこと、附属幼稚園、附属義務前期課程、附属義務後期課程の先生方も来校くださり、本校の研究に対して様々な視点からご意見をいただいたところです。子どもの学びと同様に、教師としての学びも繰り上がっていくよう、学びのプロセスを大切に研究の推進を大事にしています。研究を通して実践を振り返り、他者と協議することで新たな視点を取り入れ、自己の教育観、児童生徒観、授業観といったものをとらえ直し再構築するような「省察」をすることが、教師の力量形成を図る上で大切だと考えます。

具体的には、各学部で行う学部研究会を月に1回、各学部を解いた縦割りグループでの授業研究や全体で課題共有や課題研修などを行う全体研究会を月に1回行っています。

・子どもの学びを深めるには

子どもの学びを深めるためには、子どもの発意や文脈を大切にした指導と学びを深める手立てが必要です。これまでの研究で、子どもの「学びのプロセス」が、子どもの発達段階によって一様ではないことも見えています。そこで、個々の子どもがどのようなプロセスを辿って学びを進めているのか、そして、多様な学びのプロセスの中で個々の子どもが学びを深めるために、私たちはどのような手立てを行う必要があるのかの問い返しを大切にしています。子どもが「発意」を持って主体的に学びを進めることができるよう、学びのプロセスを大切に授業づくりを行うなかで、子ども達の姿から多様な学びを見取り、学びが深まるための手立てについて考える、そんなサイクルで研究を進めています。

・附属学園の新たなる挑戦

福井大学は、今年度、総合教職開発本部を立ち上げました。本学は、平成28年4月から、小規模な地方大学として、限られた資源の有効活用を図るこ

とを目的として、教職分離を実施しています。この制度においては、教員は教員組織（学術研究院）に『所属』（人事発令）し、学長は、教員を各々の専門分野に応じて必要とされる学部・研究科に専任教員または兼任教員として、『配置』（人事発令）されることとなります。組織による分担をする従来の組織運営の仕方ではなく、関連する業務内容によって組織間で一体に業務を運営する機能的組織連合の実現する、つまり、部局を越えて、必要なところを支えていく協働機能をもつ複合型組織『総合教職開発本部』を設置しました。これは、平成25年度から取り組んでいる附属学園と学部と教職大学院が一体となった教育改革（三位一体教育改革）によるものです。

実際、私の場合は、福井大学職員として、福井大学学術研究院教育・人文社会系部門教授、福井大学総合教職員開発本部教員を兼任し、大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科専任教員、そして福井大学教育学部附属特別支援学校校長を併任しています。

附属学園は、総合教職開発本部の『インクルーシブ教育部門』において、多様な子ども達の育ちを支える学園をめざす取り組みをスタートします。附属学園（附属幼稚園、義務学校前期課程、義務学校後期課程、附属特別支援学校）、教育学部・連合教職大学院、医学部（子どもの心発達研究センター）がチームを組んで、地域のニーズに応える教育、社会・地域と連携した取り組みを探索していきます。これからの取り組みにわくわくしています。

<参考文献、参考資料>

- ・福井大学教育学部附属特別支援学校 令和元年度研究紀要、令和2年度研究紀要
- ・総合教職開発本部説明資料



スタッフ自己紹介

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー 大橋 巖



この4月から、コーディネートリサーチャーとしてお世話になることになりました大橋巖と申します。私は、2008年度に福井大学教職大学院の1期生として、学ぶ機会を与えていただきました。立場は違いますが、再び教職大学院に関われることを嬉しく思っています。どうぞよろしく申し上げます。

私は、この3月に38年間勤務してきた福井県の公立学校を定年退職しました。その間、教諭として公立の小学校に5年間、国公立の中学校に20年間、そし

て最後は、公立中学校の教頭として9年間勤務しました。その間、4年間だけ福井市教育委員会で指導主事として行政職も経験させていただきました。今振り返ってみて、多様な教職人生を過ごさせていただいたことに、改めて感謝したいと思います。

さて今回は、この教職大学院でも研修でよく使われる「3つの種」で、自己紹介をさせていただきたいと思います。

1. 大切にしてきたこと

私が教師としてあるために大切にしてきた言葉（格言）を紹介してみたいと思います。それは、①「児童の教育は、児童にたちかえり児童によって児童の内に

建設されなくてはならない。そこからではない。うちからである。児童のうちから構成されるべきものである」(淀川茂重)、②「子どもは今そこに未完の姿で完結している」(大槻武治)、③「教育とは、炎を燃えあがらせることであって、入れ物を満たすことではない」(ソクラテス)、④「昨日の教え方で今日教えれば、子どもの明日を奪う」(ジョン・デューイ)、そして、⑤「研究することは教師の資格」(大村はま)です。①は、大正7年4月から長野県師範学校で行われた淀川茂重の研究学級の実践とその背景にある子ども観、学び観を表した言葉です。子どもの個性を尊重し、その内から生まれる教育をすること、教師が教え込もうとして育つものではないということを述べています。そして、②は伊那小学校の元教諭大槻武治の詩の一節です。私は伊那小学校の研究と出会って、この2つの言葉を知りました。私の教師としての子ども観、学習観を決定づけた言葉です。この2つの言葉から、私は教育とは③のソクラテスの示した言葉のようであるべきだと考えるようになりました。①と②の子ども観・学習観から生まれた私の指導観です。

私は、「知識を注入するだけの講義型の授業から何とか抜け出したい」、そんな思いで試行錯誤しながら授業実践を積み重ねてきました。社会科の授業を「知の伝達・獲得型」の学習から、「知を構成し、創りあげていく学習」へと転換していきたくて考えてきたのです。平成5年度に赴任した福井大学附属中以来、「目標―達成―評価」型から「主題―探究―表現」型の学習活動への転換を図ってきました。社会科という教科の中でも、「探究的な学び」を実現させたいと考えてきたのです。そのために、「格致日新」(物事の本質や真理を追い求めて知識を深め、日々向上していくこと)に努めてきたつもりです。その心の支えとなったのが、④のデューイと⑤の大村はまの言葉だったのです。

2. 直面してきた課題

定年退職までの残り9年間は、教頭として3校の福井市内の中学校に勤務しました。その間管理職として、これからの中学校を支える学校運営システムの構築に務めてきたつもりです。以下の3つの課題に取り組んできました。

(1) 教師の力量形成を図る組織のあり方

研究が真に教師力のアップ、学校力のアップにつながるために、ボトムアップ型の研究組織や方法は欠かせません。教師の資質向上を見据えた校務分掌組織の見直しを図り、日常的な業務や研究の中で、いかにして目的意識の明確化と開かれた教師集団を目指していくのか、という課題です。

(2) 内部分散型コミュニティの形成

多忙化が進む現在の学校では、かつてのような自然発生的なコミュニティが存在しにくい状況にあると思います。確かに、学年会・教科会・各部会といった校務分掌上位づけられた組織は今も存在しますが、授業について語り合ったり、学校の運営について語り合ったりする機会をいかにして確保していくか、という課題です。

(3) 相似形をなす教師と生徒の活動

学校運営組織の改革が教師の意識と行動を変革し、それと相似形をなす生徒活動の運営組織の改革が生徒の意識と行動を変革していきます。教師が変わることで生徒が変わる。生徒が変わることで保護者・地域が変わり、学校が変革されていきます。ここに、生徒と教師のフラクタル構造が具体的な姿として見えてくるのです。生徒が学び成長していくと同様に、教師も同じような構造とサイクルの中で学び成長していく。そんなフラクタルな構造を持った組織と運営システムをいかに構築していくか、という課題です。

3. 共有し考え合いたいこと

私が新卒教員として赴任した約40年前の学校には、若手教師が育つ環境が整っていたように思います。同年配の同僚も多く、授業や生徒指導上の悩みを共有し、語り合う場がいくつもありました。自分たちだけでは解決できない問題については、適切なアドバイスをくれる指導力のあるよき先輩たちにも恵まれていました。学校での休憩時間における会話や、学年会や教科会といった定例の会議の場も、研修の場であったように思います。そのようにして、先輩教師が培ってきた資質を若い教師が継承し発展させていく潜在的なシステムが、かつての多くの学校には存在していたように思うのです。

しかし、現在の学校はどうでしょうか。目の前の生徒、仕事に追われ、余程のことがないかぎり同僚と教育について語り合う時間がなかなか持てないというのが多くの学校の現状ではないでしょうか。もはや、自然発生的には実践コミュニティは生まれない現状にあります。確かに、学会・教科会・各部会といった校務分掌上位づけられた組織は今も存在します。しかし、そこで語られる多くのことは、対処療法的な問題であったり、一部の教師が作成した資料（その多くは前年度踏襲のもの）の検討がほとんどです。授業について語り合ったり、学校の運営について語り合ったりする機会は、ほとんどあり

ません。教師の資質向上を図るためには、教師の真の意味での協働性・同僚性を培っていくためには、何を基軸に置けばよいのでしょうか。それは授業改革・改善しかあり得ないと私は考えています。上から突如降りてきた研究課題だけでは教師は動きません。ましてや継続した研究とはなり得ません。常に日々の授業を問い直し、少しでも自分の授業を変革・改善していこうとする、そのような風土を根付かせていくことこそが、学校改革そして若手教師育成の鍵になると考えています。

授業を通した学校改革を実現するためには、それを支える協働研究組織の編成と学校運営システムの構築が不可欠です。そのあり方を皆さんと共有しながら考えていきたいと思っています。

院生自己紹介



森下 文恵 もりした ふうみえ

本年度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに1年履修として入学しました森下文恵と申します。また、本年度あわら市細呂木小学校に教頭として採用されました。よろしくお願ひいたします。

これまで、中学校の大規模校での勤務経験がなく、小学校での日々は新鮮な出来事の連続です。まずは、子ども達がとても純粋であること。「挨拶は立ち止まってします。」と言われていたので、朝一番の挨拶は、必ず近くまで来て目を見て挨拶をします。人が嫌がることをしたり、先生が制限することをした時は、周囲の子ども達が注意します。それでもダメな場合は、先生に報告します。小規模の学校だからなのかかもしれませんが、中学生とのギャップが大きくて、毎

日癒やされています。間違いなく担任の先生方の指導によって、このような集団ができていると思います。

昨年は、至民中学校で「感染症対策を通して社会と関わる」というテーマで、総合的な学習についての取組の実践や次年度の計画を行いました。校長先生に指示をいただいたり、今後の方向性を確認させてもらったりしました。また、福井大学教職大学院の拠点校だったので、学校経営研究会に参加したり、大学院の先生方からのアドバイスをいただいたりもしました。感染症の恐れがなくならない中、学校祭や修学旅行、遠足などで何ができるか、どうしたらできるかを考え、実践したことを報告しました。また、これまでの勤務校では、総合や特活を担当することが多く、授業研究やマネジメントなどの研究には深く関わることがなかったため、非常に興味深く、多くのことを学ぶことができた1年間でした。新学習指導要領のス

タートに向けて、3年計画で取り組んできた「主体的・対話的で深い学び」について、教科で話し合いながら授業構想を練り、研究発表会を行いました。授業をお互いに参観し合い、その授業の参観の視点についても学びました。教職大学院では、昨年度作成した総合的な学習についての計画を実践し、それを省察していこうと考えていました。

しかし、職種も校種も地区も規模も全く違う学校に勤務することになり、呆然としました。4月は、業務をこなすことで精一杯でした。授業も持つことになり児童と触れあう機会ができ、楽しい時間ですが準備の時間が大変でした。細呂木小学校は全校児童が89人、職員が13人の小規模校です。ベテランの担任ばかりで、特に話し合いをしなくても例年通りの活動ができてしまうため、何の課題もないように思

われました。この状態で一体何を研究したらよいかと焦る日々でした。

異動して早々に前校長より、「10月に福井県造形教育大会があり、本校で授業を発表する。」と言われていたので、それに絡めて課題を探していこうと考えました。また、職員が少ないのでひとりが担当する校務分掌も多く、放課後や空き時間も必死に仕事をしている先生方の姿がありました。さらに職員との面談を通して、会話ができず分からないことを質問できない。児童についての話ができない。という声も聞かれましたので、それらについて改善する方法を考えようと思いました。先生方が会話ができる機会をつくったり、気持ち良く仕事ができる環境を整えたりすることで、一体感のある学校にしていきたいと思えます。



五之治 多美 どのじ たみ

連合教職大学院学校改革マネジメントコース（2年履修）に入学した五之治多美です。現在、あわら市芦原小学校に勤務し、特別支援学級担任（特担）、特別支援教育コーディネーター（特コ）を担っております。

私は大学卒業時に福井大学大学院（教科教育専攻）に進学したので、今回は、2回目の大学院入学になります。今回は院自体も当時とは異なる「連合教職大学院」。「学校組織」について学びたいと思い、入学を希望しました。入学と同時に、これまでの教員生活を振り返ると、好奇心旺盛で学びに「食欲」な面は変わらない自分が可笑しくも感じています。

「学びに食欲」について。教員として働き始め、通級指導を担当しましたが、子どもとどう関わるかに困惑していました。「子どもの捉え方を学びたい」と必死な思いで保護者と一緒に『自閉症学習会』に参加し、子どもを見る視点から学びました。同時に『カウンセリング研究会』に足を運び、年代や違う職種の

方との学びを経験しました。カウンセリングのノウハウの習得というより、公私それぞれの場での不安や悩みを整理し、自分と向き合うことができ、元気になる自分自身を体感しました。また、「学び」は、我が子を通った鷹巣ひかり保育園でもありました。園でのダイナミックな活動を子どもとともに経験し、子どもの成長や先生・保護者の熱い思いから、親としても、ともに子の育ちを見守る立場としても、楽しく多くを学ばせてもらいました。様々な経験の中で「学びに歩けばいいことがある」と体に深くインプットされました。

それから25年間、「教員としてできることを増やしたい」「安定した心で人と関わりたい」と食欲に模索してきました。教員として、親として、その時のニーズに応じた学び（教材研究・手話・発達障害・心理学等）を平日の夜や週末に、「学校の外」で「思うまま」に、細く長く続けてきました。（これは、子どもの世話や家事を引き受けてくれるパートナーの理解があったからこそ、続けられたことだと感謝しています。）

私は、約20年間支援学校やろう学校で勤務してから、小学校に異動しました。異動により、学校種による特色や組織の違いを知ることができました。小学校では多くの地域住民ボランティアの関わりがあり、子どもも学習活動で地域に出向くなど、地域とのつながりの強さを感じました。一方で、校務等の複数担当制や相談窓口の明確性、自主研修会を含む継続的な研修体制などの違いは感じました。実際、異動1年目、私は、学校唯一の特担任になり、「何をどの時期に行うか、誰に何を相談していいか」というようなことさえも、困惑しながらのスタートでした。自分が思う以上に体に負担だったのか、この時期体も壊しました。しかし、校内を見渡すと、他にも体調不良の先生、子どもの対応で苦勞している先生方の姿がありました。そんな中、とりあえず自分ができることは何かを考え、「子どもはもちろん通常学級担任や保護者の不安を少しでも軽減したい」と思いました。そして、人に頼らなくても実現できるように「自分ができることをもっと増やしたい」と、特コとしての個のスキルアップに励みました。

そして2校目の小学校である今、児童や就学相談で園児に接すると子ども達の背景である「家庭」の教育力の不安定さに直面することが多くなり、自分ができることが分からなくなりました。これまでやってきた「個のスキルアップ」だけで対応できる問題ではなく、学校組織そのものをパワーアップしなければならないと気づきました。今までは、与えられた役

割でできることに励んできたのですが、これからは学校の同僚と協力し合い確固たる組織の一員になりたいと思いました。そして、そのために「学校組織」について学びたく教職大学院入学を志願しました。

4月のカンファレンスでは小坂先生の長期実践記録を読み、「目の前の人と丁寧に向き合い話を聞く姿勢、対話を大事にする」という当たり前のようできずにいる大切なことを再確認できました。今まで私は、「学校の外」での学びにばかり気持ちが向いていましたが、これからの「学びの場」は自分自身の職場である「学校」です。自分の学校に向き合い、一緒にいる人たちとの「対話」「おしゃべり」を大切に、学校やそこにいるみんなの「可能性」を見つけ、生かすことから始めたいと思っています。

最後に、私のもう一つの関心事は「競技かるた」です。あわら市はアニメ「ちはやふる」の舞台の一つでもあり、親近から子どもと初めて4年になります。小学生から大人が入り交じり、礼に始まり、無心で一枚に集中し競います。その無心の瞬間が心地良く、我が子がかかるたを離れても、なかなか勝てなくてもやめられずにいます。これからの2年間、教職大学院の日程と、かるたの練習会や大会が重ならないことを願いながら、どちらも大事にする気満々の私です。

2年間、どうぞよろしく申し上げます。



山中 太継 やまなか ひろつぐ

今年度より教職開発研究科・学校改革マネジメントコース（1年履修）に入学しました山中太継です。この春の定期異動に伴い、現在は嶺南教育事務所で勤務しています。初任校は敦賀市の松原小学校でした。その後は気比中学校、三方中学校、小浜中学校、上中中学校と嶺南の中学校に

勤務し、今年で教職歴26年目となります。教科は理科で、住まいは若狭町です。

さて、昨年度、私は県のマネジメント研修に参加させていただきました。同時に、教職大学院に向けての事前履修という形で、大学院での学びに参加させていただきました。私が教職大学院を希望した理由は3つあります。

- ① 学校でマネジメントすべき対象を見失ったこと
- ② これからの授業に迷いが生じたこと
- ③ 身近な大学院生の存在

理由を順に説明することで私の自己紹介に代えたいと思います。

私は小中学校で17年間担任をしてきました。もともと好奇心が強く負けず嫌いな性格で、体育大会や合唱コンクールなどの学校行事では、自分が学級の前頭に立って子供たちを鼓舞し、他の学級に勝負を挑むような担任でした。理科の授業についても同様で、少しでも子供たちに理科の「考える面白さ」を伝えようと努力し、テストの点数にもこだわってきました。中学校の部活動も自分の性格には合っていたようです。今までソフトボール部や卓球部、科学部の顧問を経験してきましたが、それぞれの部活動で勝負を仕掛けてきました。科学部では三方五湖の水質調査やロボットコンテストに取り組み、ロボットコンテストでは福井県代表として静岡県 of 東海北陸大会に出場しました。部員と一緒に校舎内に水槽を設置し、川魚やウナギ、エビを飼育しました。部員にとって水槽の管理は大変でしたが、校内に水槽を展示することは彼らの誇りになっていたように思います。ソフトボールは中学校3校で、のべ13年間顧問を務めました。多くの生徒や先生方と出逢い、素晴らしい思い出を貰いました。大会でもよい成績を残すことができました。

担任の後は学年主任を4年間務めました。自分の前に学級の子供たちがいないことに戸惑いましたが、学年の先生方と一緒に学年を創り上げる楽しさや、学年の若い先生方を育てる楽しさを感じることができ、とても充実していました。そのとき苦楽を共にした学年の先生方は、今でも同士です。

学年主任の次は生徒指導を担当しました。このことが今回の教職員大学院につながっています。生徒指導になってみると目の前に学年の生徒も学年の先生方もいません。学年主任であれば自分の考えを学

年経営に反映させることができますが、生徒指導はいったい誰に・何を・どうマネジメントすればよいのか？全く分からなかったのです。学校におけるマネジメントとはどういうことか、その糸口を探しに県のマネジメント研修に参加させていただきました。

次に②についてです。学校現場では学習指導要領が改訂され、小学校から順に新学習指導要領のもとで授業が始まりました。またGIGAスクール構想にコロナ禍が加わり、一人一台端末が一気に全国の学校に整備されました。教育のデジタル化は加速度的に進みます。急激に変化する中で、今後授業はどうなっていくのでしょうか？教師の役割はどうなるのでしょうか？AI教材からは一人一人に個別最適な学習が提供され、YouTubeからは分かりやすい学習動画が大量に提供されます。私はもうすぐ「学校の授業」のパラダイムシフトが起きると思っており、今その入り口に立っているように感じています。学校の授業の価値が大きく変わるでしょう。しかしより深まる価値もあるはずで、これからの授業を考えた時、どのような授業になっていくのか？大事にするべき価値とは何か？これらのことを教職大学院での学びを通して、自分の中に落とし込みたいと考えています。

最後に③についてです。昨年まで勤務していた上中学校は若い教員集団で、主任はすべて40代でした。それぞれの主任は学校改革の意識が高く、新しいアイデアを積極的に学年や学校経営に取り入れていました。その主任の中から毎年マネジメント研修や教職大学院に参加する仲間が現れました。身近にいる学び続ける仲間の存在も、私が教職大学院に興味を持った理由の一つです。

振り返ってみると、私が教職大学院を目指すにはよいタイミングであると思います。教職大学院での学びを通し、これから来る学校のパラダイムシフトに積極的に関われる教員を目指します。皆様どうぞよろしくお願いいたします。



上中 一司 かみなか かずし

今年度より、学校改革マネジメントコースに入学することになった、上中一司 54歳です。教職員歴は、平成元年度採用ということ、30+令和の年数となります。この年になり、新しいことにチャレンジしていくことは、不安もありますが、期待の方が大きい感じです。

私は農学部出身で、教育学部を卒業していないので、授業やクラス運営、生徒指導等をしながら、常に心のどこかで、これで正解なのだろうかと考えていました。福井大学教職大学院で学べることは、自分にとって学び直しであると同時に、教職人生の欠けた部分を補う作業のようで嬉しく感じています。就学してまだ3ヵ月ですが、連合教職員大学院での学びは、自分が教育に対して漠然と感じていたことが、理論化されており、明確で分かりやすいと感じています。カンファレンスやラウンドテーブルでは、先生方の発表を通して、実践したからこそ醸し出されるエネルギーや、感情の起伏を感じ取ることができ、文字からは得られない情報量の多さにワクワクしています。また、その後、発表内容や実践について語り合うことで、自分の考えを確認できたり、他人の意見を聞いて多様な価値観を得たりと非常に刺激的に感じています。

教職員としては、高校籍で理科（生物）が専門です。勤務校としては、地域密着型の普通科校、新設校、進学校、また、実業系の高校を経験させていただきました。それぞれの学校で、理科の教科指導、受験指導もさることながら、学校設定科目「環境」や、SSHを実践する理数科の担任等を体験させて

いただき、理科の教員としての幅が広がったと感じています。また、担任歴が長く、部活動も頑張ってきた、古いタイプの教員だと思います。

現在は、福井県教育総合研究所で教科研究センター理科教育科（通称サイエンスラボ）に属しています。県内教員の理科授業及び、実験技術の向上や、生徒の科学的思考力を伸ばさせる等、福井県の理科教育を育成する仕事をしています。具体的には、①理科実験支援事業（遠隔、動画、サイエンスカー研修）、②生徒実験支援（高校生実験座、生徒課題研究支援）、③東大・京大の研究者に学ぶ講座、④缶サットHigh School（各チームのミッション応じて、空き缶にプログラムされた電子機器を搭載し、50mの上空から放出してデータを取り、ミッションの達成目指す取組み）を実施しています。実践報告に関しては、「理科教育課を通してのマネジメント」の表題で、どのようにして、福井県の理科教育を育成する取組をしたのかを記していきたいと考えています。

現在の楽しみは、登山とジョギングです。この夏に福井で高校総体登山競技があり、役員として参加するので、体力と体重を整えるためにジョギングをしています。Youtubeで走り方（フォーム）を確認し、ジョギング用アプリでデータを取りながら走ることが今の楽しみです。足慣らしに、文殊山を登ることがあるので、見かけたら声をかけてください。

現在はコロナ禍で、直接会ってお話する機会が少ないですが、いつの日かコロナ禍がおさまれば直接会って、教育や趣味について語り合えることを楽しみにしています。よろしく、お願いいたします。



瞿曇 俊雄 ぐどん としお

今年度より、教職大学院の学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました。教員になり30年近くになりますが、敦賀市内の中学校での勤務経験しかありません。近年は、教務主任や学年主任を務めています。現在は生徒数約700名、職員数約60名の粟野中学校に勤務しています。田んぼが広がるような田舎の環境であり、地域の活動も盛んで、地域・保護者の方は非常に学校に協力的な風土です。この粟野中学校に勤めて4年目になりますが、転任してきたときから教務主任を努めており、学校の運営に大きく携わっています。しかしながら、「生徒のため、職員のために自分に何ができるのか。何をしなければならぬのか」について毎日非常に悩んでいます。幸い、管理職、まわりの教員に恵まれ、なんとか日々を過ごしている状態です。そのような中、この教職大学院で学べる機会があり参加させていただきました。前述の通り、敦賀市内の中学校のみの勤務ということで、本当に視野の狭い考えしか持てない状態でした。しかし、4・5月のカンファレンス、6月のラウンドテーブルに参加したときは、高校の先生、幼稚園の先生、福祉施設の方、県外の先生また大学院の若い先生など、多様な人の話を聞くことができました。自分とは異なる考えに触れる中で、自分自身「もっと学ばねば」と強く思うことができました。一人一人の方からもっと話を聞きたいと感じました。そして現在、本校の職員に対してももっと考えを知りたい、本音で語り合いたいと強く思うことができるようになってきました。そのことが、生徒や職員の成長に結びつくのだと思います。

私が、教職大学院に入学するにあたり考えたいテーマのひとつは「労力対効果」です。近年、働き方改革が進められ、同時にコロナウィルス感染症対策での行事削減も重なり、従来の考え方を改めて見直す

機会を持つことができました。体育大会、修学旅行、校外学習など相次いで縮小や中止になりました。このような何もできない状況の中で、生徒とともに何ができるのか、行うことでどんな効果があるのかとともに考え有意義な行事を行うことができたような気がします。コロナウィルスは社会にとっては明らかにマイナスなものです。プラスに考えることもできると感じました。コロナウィルスがなくなっても、そのような視点を持つことも大切だと考えます。どんな教育活動でも、行えば必ずプラスにはなりません。しかし、それが、労力に見合うだけのものか、労力を使った分それがどこかにマイナスとなって現れていないのかということについて考えていきたいと思えます。そのために、一つ一つの教育活動の意味を考え、教職大学院でふれあえる多くの方々意見を参考にして、精一杯取り組んでいきたいと思えます。

また、テーマとしてもう一つ考えたいことは「これからの社会を形成するために必要な力の育成」です。これは、最近、日常生活でよく感じていることですが、分からないことがあっても、ネットで調べれば大抵解決するのです。従って、知識はそう深くまで持っていなくても大丈夫だということです。一方、その大変多くの知識をどのように使っていくかということは難しいです。様々な人の様々な考えがありどれも正解である。どう選ぶのかは、コミュニケーションを取り協議していくことでしか決められないということです。今の子どもたちには不足している力だと思います。だからこそ、どのような方法でこの必要な力をつけさせていくのかということはこの大学院で学べればと思っています。この大学院自体が、コミュニケーションを取り協議していく場であるので、自分自身がそういう場におけることも大変幸せに感じています。

大学院生活は今始まったばかりですが、確実に自分の力にはなっているような気がします。これから2年間よろしくお願いたします。



内田 祥子 うちだ さちこ

今年度より学校改革マネージメントコースで学ばせていただいております内田祥子(うちださちこ)と申します。私は、滋賀県の栗東市立保育園、幼稚園、幼児園勤務を経て、現在は栗東市役所に勤務しております。

私が教職員大学院で学びたいと考えたきっかけは、教職員大学院の岸野先生の講義を聴かせていただいたことがきっかけです。ちょうどその時期に勤務していた保育園で、小学校への接続を軸として『学びに向かう力』について研究実践に取り組んでおりました。就学前の子どもたちにとって、生活、遊びそのものが学びであり、0歳児からの学びの連続性をいかに具現化していくのかということの研究のテーマにし、子どもが何を求めているのか、子どもの姿から出発し、自らが必要性を感じて遊びの場を広げていけるような主体的な姿を求めて実践を進めていました。その目指したい保育の在り様が、岸野先生のお話そのものだったのです。そして、その際、保育現場に在職しながらでも学ぶことができるというお言葉に、「自分自身をもっと学びたい」という思いが急に溢れ出した感じでした。教職大学院に入学できるまでには、岸野先生をはじめ、半原先生、谷先生にたくさんのご指導を賜りました。自分の実践を振り返り、また何を見出していきたいのか考える中で、その感じた事こそ、保育を進化させていく原動力になるのだと実感しました。今は、教職大学院での学びの機会をいただいたことに、本当に感謝しております。

今年度も保育の現場で、「子どもたちの主体的な姿を求めて、遊びの中の学びを発信できるような取り組みを進めたい。」と考えていましたところ、この4月に行政に異動になりました。今までのように、子どもたちの楽しそうな声が響く環境ではなく、転職レベルとも言うような異動で、慣れない業務に追われる日々です。自分自身に余裕もなく、ただ目の前の仕

事をこなしているという様な状況の中で、4月の月間カンファレンスに参加しました。

初めての月間カンファレンスでは、資料や実践報告をじっくり読み進めるという貴重な機会をいただきました。これほどまでにじっくりと文献と向かい合う時間は、恥ずかしながら私にとって久しぶりのことでした。その有意義で贅沢な時間であったことは、言うまでもありません。先生方の実践報告を読ませていただきながら、その熱い思いや様々な実践の展開に、心が揺さぶられました。また資料に関しては、自分の読み取り方だけでは不十分で、先生方とのセッションの中で意味理解を深めることができました。私のつたない解釈や意見についても温かく受け止めてくださり、様々な所属で実践されている貴重な取り組みについて聴かせていただくことができ、大変充実した時間でした。

2回目のカンファレンスでは、特に今年度の実践が動き出した中で、先生方の取り組みや思いについて聴かせていただくことができました。私自身は現在の立場の中で、まだまだ主体的に動いていない自分を振り返る機会となり、今の行政という場で何ができるのか、どのように実践していけるのか、改めて自分の考えを整理することができました。「語り合う」ということによって、それまで自分の中で、不確かであったものが豊かな可能性として変化していくことを感じました。「語り手は聴き手と共に語っている」このことは、自分自身の実感とともに、今後、実践の中でも大切に心に置きたいと思えます。

様々な所属の先生方との出会いをいただき、学ばせていただけることに大変感謝しております。主体的に行動し、探求、協働できる子どもたちを育ていくためには、そこにかかわる大人も学び続け、その価値を共有していくことが必要であると考えます。私自身、もっと学びたいと感じた気持ちを大切に、取り組んでいきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。



熊崎 敦子 くまざき あつこ

こんにちは。今年度より、学校改革マネジメントコースで一緒に学ばせていただきます熊崎敦子です。2年間どうぞよろしくをお願いします。

現在、岐阜県羽島市立中央中学校に勤務して6年、初めて教務を務めています。教員生活は今年で19年目になりました。小学校の時にバスケットボール部に入ってから現在に至るまで、形を変えながらですが細々と競技を続けています。また現在バスケット部顧問として、自分の好きなことに関われることに感謝しています。

私が現在勤務している羽島中央中学校は、1つの小学校から1つの中学校に入学する公立中学校です。小学校から同じ仲間とともに過ごす中学校生活で、仲間から一歩抜け出し、自分の進路を決め、自立し成長していく姿をそばで応援できること、少しでもその手助けができることが今の私の喜びとなっています。

現在は教師という仕事に喜びや生きがいを感じているところですが、実は自分の中学3年時の進路懇談で「絶対に先生だけにはなりたくない。」と口にしました。「お前、教師になれ。」と部活顧問兼担任の先生に目の前で言われたときです。「人前で話すことが苦手。先生という職業は自信がなければできない。何より生徒を相手に大変な仕事だ。」と思っていたからです。そして「私にできるはずがない」と。そんな考えは大学生になっても持ち続けていました。まさか今、担任の言葉通りその道を歩み、毎日充実した日々を送っているとは、不思議に思います。

私が教職大学院に入学を決めるとき、かなり後ろ向きな気持ちがありました。現在の学校ではじめの3年間は担任として、その後、学年主任、生徒指導、教務と1年ごとに自分の役割が目まぐるしく変化しました。担任とは違う立場から、学校全体を見たり、部分を見たり、人と人をつなげてみたり、これまでと違

った視点や新たな考えを受け入れたり、示したりすることを自分なりに求めるようになり、これまでの自分の狭い視野や世界観では足りない、対応できないと感じ、悩み始めていたところでした。また職場の構成も変わりつつあり、自分の立場で何をしていくとよいのだろうと考えるようになりました。そんなときにお話をいただき、働きながら大学に行くとは…？教務をしながら大学で学び、実践論文を書く大変さを想像すると…。「なぜ私なんだろう」いろいろと考えが巡り、原点に立ち返っては悩んでを何度か繰り返しました。前向きに考えるようになったのは、声をかけてくださった方の「教師は学び続けることが仕事。これまで見えなかったものが、見えてくればもっとできることが増える。」という言葉聞いてからです。そして「人生、いくつになっても勉強、これからさらに学べるなんてありがたいこと。」の母の言葉にも背中を押されました。

さらに入学相談の折に、大学の先生から教職大学院の講義の内容について教えていただきました。「とにかくいろいろな人と対話する、語る、そこでさまざまな経験や考え方を垣間見るうちに自分の視野が広がっていく。面白いよ。」そのような話を聞くうちに「新しい見方を増やしたい。視野を、自分を広げたい。せっかくだから前向きに！」自分が求めているものを得るために入学を決意しました。

教職大学院が始まり3か月、合同カンファレンスでの様々な校種の先生方との対話はとても刺激的で、自分がまさに求めている視野を広げる、自分を広げることにつながっています。資料を読んで感想を述べあったり、実践をお聞きして自分の感じたことを伝えたりすることで、これまでになかった考え方や新しい見方、価値づけ方などが自分の中に浸透して、確かなものになっていくことを感じます。

反面、お話を聞くたびに自分のこれまでの実践に足りなさを痛感し、これからの実践については、はっきりとした手掛かりがつかめていないのが現状です。目の前の働き方改革のための時間づくりやICT活用、

若手教員との距離を埋めるために、どうしたらいいのだろうと模索中です。現場の課題は日々、山積みでそれだけで手一杯な自分がどこまで「改革」という渦を創り出すことができるのか、楽しみでもあり不安でもあります。

竹中 智子 たけなか さとこ

今年度、ミドルリーダー養成コースに入学しました、竹中智子と申します。勤務校は、神奈川県川崎市にあります、カリタス女子中学高等学校で、16年目の勤務となります。教科は数学科で、校務分掌は生徒会部、バスケットボール部の顧問をしております。

私は、話を聞いたり話をしたりすることが好きで、いろいろな方の意見を聞かせていただいたり、自分の考えを話して指摘していただいたりできると思うと、これからの2年間がとても楽しみです。多くの方の考えを自分の中に取り込み、自分の栄養に変えて自分自身をさらに成長させていきたいです。しかしながら、私の苦手なことは、考えをまとめること、文章を書くことです。長期実践報告はもちろん、毎月のカンファレンスなどでのまとめなどもうまくできるか不安でいっぱいです。発表される方々の、工夫のあるスライドなどを参考に、文章力もこの2年で身につけられればラッキーと前向きに捉え、一生懸命取り組んでいきます。

私立学校は、異動がなく勤続年数の長い教員も多くいます。じっくりと同じメンバーでプロジェクトを進められるという良い面もあれば、マンネリ化し新しいアイデアが出にくい面もあります。その点では本校には、福井大学教職大学院の卒業生である同僚が既に数名いて、カリタス学園（幼稚園・小学校を

これからの教職大学院での2年間で、たくさんの方と出会い、そして語り合いながら少しでも視野を広げ、新しい考え方を取り入れながら、自分自身を広げたいと思っています。多くの先生方の素敵な学びに触れる機会を大切に、学び続ける自分に期待したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

含む)全体では、さらに多くの教員が卒業しています。他校の実践を聞き、自らも課題を持って取り組む姿を間近に見てきたので、今度は私がその立場になります。この教職大学院での学びを、数学の授業や、生徒会部の活動、クラブ活動やクラブの生徒と行う奉仕活動の中に還元し、そこで得たものを、本校の同僚や教職大学院で共に学ぶ先生方と共有できるよう、これからの日々を意識しながら過ごしていきたいと思っています。

世の中はコロナ禍で、いつも通りの生活が出来ず、学校行事が中止になったり、感染対策を考慮した形への変更など、今までになかった、前年度と同じように進められないことでいつも以上の疲れがあります。その上、1歳と4歳の娘たちの子育てと仕事の両立をしながら大学院での実践となります。本当にハードな日々で、大忙しですが、学び続ける姿勢を子供たちに間近に見せられることは、コロナ禍の今だからこそなのだと思います。オンラインよりも対面で皆様と同じ空間を共有しながら語り合える方が実りは大きいかもしれませんが、オンラインだからこそ得られるものもあると信じて、自分の今置かれている環境の中で精いっぱい取り組んでいきたいと思いません。皆様、よろしくお願いいたします。

ミドルリーダー・マネジメントコース便り

ある日のミドルリーダーたち

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス女子中学高等学校 法士 明子

私の所属する「学習進路指導部」には福井大学教職大学院ミドルリーダー養成コースの先輩が二人いらっしゃいます。お一人は本校では一期生になる黒瀬卓秀教諭（理科・主事）、もうお一人は三期生の長谷川純一教諭（数学・中一担任）です。長谷川教諭は教職大学院で学んだ授業研究にお力を入れており、年に二回の授業研究を中心とした職員研修の計画に心血を注いでいます。

今年度も前期は6月23日（水）の放課後に、職員研修を開くことが決定しました。一週間前からどなたか気になる方の授業を拝見し、見学した日時、授業の内容、使用教材、機材などの他、「授業の気付き・発見」「自分の授業へのフィードバック・改善」「授業者へのコメント」などを書いてタブレット上に提出します。これは「学習進路指導部」の企画として職員会議にも通されます。

長谷川教諭の「全ての元は授業」というお考えは素晴らしく、授業研究なくして学力の向上もないという点など大変共感しています。伝えたいこと、検討したいことが山ほどあり、1時間半ちょっとの研修の時間では到底足りないような内容を示して下さい。毎回計画の段階から大変刺激を受けています。でも、やはり時間は1時間半……。どこかに内容を絞っていかなくてはいけません。どれも削りたくないような大切な内容です。どうしたものか……。教職大学院で学べば学ぶほど、その答えがなくなっているのを私自身も感じていました。

そのような時、黒瀬教諭が「授業研究のものは、まず授業をいつでも開いて、職場作りっていう面が大切にされていて……。」「と何気なくおっしゃいました。そうか、「いつでも開かれた場」「いつでも開かれた授業」それが授業研究の始めにあるな。何度も聞いてきた言葉でしたが、こうしてぐるぐる悩んでいるときにポンと投げかけられると、ものすご

くスポットライトを浴びた言葉のように感じました。「職場作り、それがまず大切なら……」そこから今回選んでいきたい事柄が少しずつ見えてきました。研修作りのお手伝いは到底できませんでしたが、自分の拙い考えを長谷川教諭、黒瀬教諭に伝えて「授業研究とは何か？」という疑問を自分自身で考える時間になりました。

「職場作りっただけでは、もちろんないのだけれどね、」黒瀬教諭がそうおっしゃった後、「これ、読んだ？これに色々書いてあるから。」と一冊の本を貸して下さいました。それはあちこちに沢山付箋が付けられて読み込まれた、秋田喜代美先生の『学びの心理学 授業をデザインする』（左右社）でした。不勉強でまだ読んだことがなく、早速お借りしました。

パラパラと拝見するだけで教師像の提起として「技術的熟達者」「反省的熟達者」がある、子供達の「談話と学習」、聞いたことはあるけれど、実はしっかり知らなかったという言葉ばかりが目につきました。もう一度、書籍をしっかり読んで学び直すきっかけを下さいました。

不勉強は恥ずかしいですが、改めて職場に自分自身の素晴らしい学びの場をいただいているな、と感謝の思いでいっぱいになりました。生徒から、実践の授業から学ぶことも沢山ありますが、こうして「ミドルリーダー」同士の学びがいかに大きくありがたいか。教職大学院を修了した先輩方は、今後輩である私がどのサイクルで悩んでいるのかも、きっと手に取るように理解して下さいているのでしょう。

今回タイトルを「ある日のミドルリーダーたち」とさせて頂きました。これは周りから見たら全

く特別でない、日常の「ある日」のできごと、ということをお伝えしたかったからです。当たり前がこのような「ある日」があることに、本当に感謝しています。これまでもこうしたありがたい学びがいくつもあったに違いありません。

忙しい日々ではありますが、できるだけ折を見て立ち止まり、振り返りたいです。自分が今何に対し

てどのサイクルにあるのか、誰がどう助けてくれたのか、そして今度は自分がミドルリーダー（どうしても「リーダー」という響きが自分にはしっくりこないのですが）として何ができるのか……、先輩達の姿から学んでいきたいと思っています。

VUCAの時代、やはり最後に頼れるものは「人」であることを実感しています。

6月の雨空に寄せて

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立武生東高校 仲保 彰人

私は今年3年生の担任をしているのですが、6月に入って「夜あまり眠れない」「昼になると眠くなる」という声をよく聞くようになりました。寝る直前までスマートフォンなどを使用している可能性もありますが、大学入試が近づいてきて将来に対する不安や、学力が伸びないことに対する焦りも募っているのかもしれない。加えて、折からのコロナ禍で行動に制限を強いられることが多く（今の3年生は結局修学旅行にも行けていません）、社会全体にも重苦しい雰囲気が漂っているので、余計疲れを感じてしまうのかもしれない。昨日も福井県で緊急事態宣言が発令されましたが、一層注意するようにと指導するのがなんだか心苦しい気持ちになりました。生徒たちに寄り添うためにも、とにかく今年は生徒の話聞いてあげようと年度当初から考えています。

かく言う私も、趣味であるお城巡りに行けないストレスと、今年度末には長期実践報告を書かなければいけないという将来への不安で最近よい睡眠取れていない状況です。そんな中、昨日のラウンドテーブルでは、100分という模試のような発表時間を頂き、それこそ前日には「100分もつのだろうか」という不安感でなかなか眠れなかったりしたものです。

が、参加していただいた先生方のご質問やご支援、これまでの経験から感じたことなどを伺いながら、無事に終わることができました。ラウンドテーブルは3回目になりますが、始まる前はいつも緊張しますが、毎回終わると「参加してよかった」「明日から頑張ろう」という気持ちにさせていただいています。自分も生徒との面談の時には「傾聴」の姿勢を大事にして、話ができよかったと思ってもらえるようにしたいものです。

最後にちょっとだけ良かった話を。最近になって自分のクラスの生徒で教員志望の生徒が少しだけ増えました。理系なので医療系、工学部系に進む生徒が多いからなのですが、なんとではなくですが、「教師の魅力を伝えられていないのではないか」「ブラックだと思わせてしまっているのではないか」とさみしく思っていたりもしたわけですが（実際教員志望の多くの生徒が「良い先生に巡り合っているから」と志望理由を話します）。御多聞にもれず、生徒たちは福井大学を志望しているので、福井大学の先生方、何卒よろしく願いいたします。彼らが無事大学に入学し、教員への道を力強く歩みだしてくれれば、私の睡眠時間も多少は長くなることでしょう。

学校作りへの熱意

学校改革マネジメントコース2年/高浜町立高浜小学校 松見真希

コロナ禍において教職大学院スタッフの皆様のご尽力のおかげで、オンラインで学ばせていただいた1年目を終え、あっと言う間に2年目の出発を迎えました。昨年は画面越しとはいえ、多くの院生の方々との出会いを経験し、私的にも交流を深めることができました。その中で私は理想の学校とはどのようなところか、今ある学校をさらに子どものために、地域の未来のために素晴らしい組織にしていくためにはどうしたら良いか、と常に自問自答したり、仲間と語り合ったりしてきました。それは私の世界を大きく広げてくれる素晴らしい経験でありました。

学校作りに目が向く一方、子どもたちの学びを深め、つながりを広げていくということこそが学校文化の形成であり、私にとって忘れてはならない大事な取り組みでした。子どもというのは素晴らしいもので、教員の目が向く方へ勝手に進んでいってくれます。つまり私たちが地域とともに生き、未来に目を向け、他者とよりよくつながっていききたいという意識を持ち続ける限り、子どもも同じように学校の中だけでなく広い世界で育っていくことができるのだと思います

昨年は学校の中に「子どもを真ん中に置いたコミュニティ」を形成したいと考え、情報交換と称する場を設け、同僚の先生方のご協力を得て語り合いの時間を持つことができました。学校の子どもの誰かが自分の子どもと思えること、どの教室も自分の教室と思えるようなつながりの中で子どもを育ててい

く環境作りを目指してきました。今年はまた新たに気掛かりな子どもへの支援に携わる先生方が集まって、世代を超えて子どもについて語り合う支援のコミュニティを立ち上げ、「子どもを見る目を養う」ことに挑戦していきたいと考えています。

また学校の枠を超えて、学び合う場のコミュニティをいかに形成できるか、ということも考えています。例えば地域の方と子どもたちが、町の未来について語り合う場をどう設定するか。地域の方に単に「教えてもらう」だけでなく、子どもが課題意識を持って意見を述べ、それに真剣に耳を傾ける地域の大人との対話はいかに実現できるのか。きっと私たちが「できない」と決めつけないで、子どもの力を信じることから始まるのだと思います。

また教員同士が学び合うコミュニティは学校の枠を超えて形成できるのか。このことは地域の教育力の底上げと学校の未来にも通じる大きな課題でもあります。私に何ができるのか、またどうすればいいのか考え、具体的に実践を積み重ねていければ、と思っています。

何をするにも、この教職大学院で出会った仲間や先生方の存在は私の力となり背中を押してくれています。心にいつもいる学校作りへの熱意を持つ県内の同志の存在、全国にいる、ともに語り合った仲間の存在とともに一歩ずつ歩みを進めていきたいと思っています。

保育と見つけ合う2年間

ミドルリーダー養成コース2年/福井佼成幼稚園 福田 亘哉

保育士になって2年目。密かに興味をもっていた教職大学院に、周りの先生方に背中を押していただき勇気を出して入学させていただいた。それからあっと言う間に1年が過ぎた。コロナ渦の中で過ごした大学院ではオンラインばかりだったので、苦手だ

ったパソコン作業が得意になったような気がする。1年目の目的は、「自分の保育ってなんだろう」と疑問を探求した。主体的な子どもの姿を育むためにどんな保育がいいのかを、カンファレンスや集中講座でいろんな校種の先生方と語り合い、いろんな教育の

やり方があることを知った。その学びをもとに、なかよしタイム（遊びこみの時間）での、手段の選択の投げかけや全体活動での投げかけ等、様々な事を試し「あまり子どもが食いつかないな?」「なんでこの子どもたちは、この遊びが続いているんだろう」と、焦点を当てて悩む自分に、今まで大事なことを考えていなかったことに気づいた。また、自分の実践を報告する機会が増え、自分自身を振り返るきっかけになり、その実践に対して褒めていただくことの嬉しさや、アドバイスをいただくことで新しい保育観を感じる事ができた。

本年度は、長期実践報告に向けてどのようなことを書こうか、と悩んでいる最中である。今考えていることは、「みんなの時間（振り返りの時間）のあり方」だ。1年目からやってきている『みんなの時間』は、クラス全員が1つの円になって、今日楽しかったことや工夫してみたことなどを発表し、遊びの発信、共有をする場を設け、興味のある遊びをさらに深めていくという目的を持って行っていた。しかし、恥ずかしくて発言できずにいる子、話の場に興味を持たずに落ち着かない子などいろんな姿が見られてきた。どうにかして話に興味を持つように、発表者の話を盛り上げたり、質問をくり返しては話を彫り深めたりしていたが、改めて考えると保育者が半分以上、主導権を握っていたのではないかと思った。そのこともあり、自分自身があまりみんなの時間に対してやる気が起きないまま2年間やり続けていた。しかし、昨年度から園長先生の助言で「少人数でやって見るのはどうか」という提案をいただき実践してみた。30人クラスを、10人ずつのグループにしてみんなの時間に取り組んでみた。すると、30人でやる時よりはるかに話は盛り上がり、話に参加する姿勢が積極的になった。さらに、今年度では「みんながどんな気持ちで参加しているのかを知るために、グー、チョ

キ、パーで意思表示してみたらどうだろう」と言う案が出てきた。そこで、子どもたちと「一人で発表したい時はグー」「誰かと発表したい時はチョキ」「今日は恥ずかしいから発表したくない時はパー」と、システムを作った。それをして見ると意外にもパーをあげる子が少なかった。その実践を、4月の開校式にセッションで発表した。すると、岸野先生から「クラス全員がグーになる時がきたら面白い。しかし、振り返りの時間は遊びの共有の場であって、意思表示を強制的にする場ではない」と、言葉をいただいた。それを聞いて、この方法は強制的な意思表示になっていないか?と感じた。子どもが発言しやすい環境、強制的にならない環境にするにはどうしたら良いかを考えた。そこで出てきたのが、遊びのジャンルごとにチームを組んで、4人グループでみんなの時間をする事だった。8つのグループができるが、保育者がその輪に入らなくても子どもたち自身で、話し合いの流れを決めて進める姿が見られた。少人数の方が友達と雑談のような感じで気楽に話せるので、いつもは恥ずかしがって発言しなかった子も楽しんで発言して参加していた。だが、このような事ができるのも、3、4歳児のときにみんなの時間を繰り返し行ってきたことで身についた力なのだと思う。

子どもが主体的に園で活動していける保育をするために、みんなの時間を初め、遊びこみの時間や朝の会など当たり前かになっていることを改めて見直す事が大事だと思う。今後、色々な実践を通して大学院で報告させていただき、「主体的な保育」と見つめていきたいと思う。また、7月から始まる「男性保育士研究会」でも、男性ならではの悩みや、保育のやり方などを共有し会える場が開かれるので、自分の保育観にもさらに磨きをかけて、子どもたちのために楽しく学び続けていきたいと思う。

行事の在り方を問い直せるように

ミドルリーダー養成コース2年/横浜市立青葉台中学校 黒津 彰紀

去年一年間を振り返ってみると、当たり前が通用しない年でした。大学院に入学をし、4月5月の休校期間中はオンラインで行われた月間カンファレンスを通じてたくさんの先生方と交流をするなかで刺激をもらい、休校が明けたらこんなことをしてみよう、あんな話をしてみよう、と休校期間が明けるのを待ち焦がれていました。在宅勤務をすることもあり、比較的時間や気持ちには余裕をもって生活ができていました。しかし、学校が始まると、そんな余裕は吹き飛ばす怒涛の日々の連続でした。まず、午前と午後で分散登校となり、授業が一気に倍に増えると同時に感染症防止のために日々の消毒作業などやらなくてはならないことが一気に増えました。修学旅行などの宿泊行事は中止となり、学校行事の目玉でもある体育祭や文化発表会も感染対策を講じて、例年とは形を大きく変えることになりました。例年通りにできていたことができなくなり、形を変える必要に迫られてから、行事のもつ意味や例年大事にしてきたことを問い直すことになりました。しかし、私はその意味をすぐに答えることができませんでした。意味より先に例年通り、もしくは例年になるべく近い形をとるためにはどのようにすればよいのかを考えていました。それは「例年通り」という言葉がある種の思考停止であったことに気づかされました。特に係で担当していた文化発表会は例年通りでいくなれば、体育館に全員が集まって発表などをするものが、体育館に全学年を入れることができなくなりました。そこで、なんとか一体感を持たせようと、体育館と教室をカメラで繋いでライブ配信をするという新しい形での文化発表会を行いました。しかし、リアルタイムで生徒からはライブ配信にすることで、より教室と体育館の距離が遠くなったと感じた生徒が多くいました。なんのための文化発表会であり、生徒たち自

身が文化発表会に何を求めているのかをきちんと明確にできなかったという反省が残りました。

他方で、プライベートでは第1子が年末に生まれました。生まれてきた息子の可愛さはさることながら、育児の日々はこちらの予想をはるかに上回ることばかりです。わが子が生活の中心になることを感じながらも、自分が親になることによって、親の立場で学校を見るということが以前に比べて実感を伴ってよりリアルに見ることができるようになってきました。

そして4月。今年は休校がないことにほっとしながらも、私は文化発表会実行委員の長を任されることとなりました。初めて学校全体を動かす長としての役割を担うことになり、またこのコロナ禍での制限のある中での実施に向けて動いています。ですが、今までは長の人についていけば良かったものが、突然自分が先頭を切らなくてはならないことにプレッシャーを感じながら、なかなかうまくいかない日々を過ごしています。そんなときに力をもらうことができるのが、ラウンドテーブルや月間カンファレンスです。自分の悩みを聴いてもらいながらも、自分にはない視点でのお話や勇気をもって職場に戻ることができています。

今、コロナ禍で行事を行う意味を改めて突き付けられています。なぜ感染の危険があるなかで文化発表会や合唱を行う必要があるのか。青葉台中学校は生徒や地域から合唱を大切にしている学校だという認識をもたれています。なぜそこまで合唱を大切にしてきたのか、合唱の何を大切にしてきたのか、目指すべき姿は何なのか。去年はそれを自分一人で考えてきました。しかし、今年はそれを自分だけが問い直すのではなく、職場の同僚を巻き込んで考えていきたいです。本年度もよろしく願いいたします。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

学びのある活動を構成するために

授業研究・教職専門性開発コース 2年/福井市中藤小学校 大西 美穂

本稿では、金曜カンファレンスで行っている、文献検討による『参観記録』に関する学びについて報告する。

現在、金曜カンファレンスでは、『〇〇な力を育むために』というテーマで1年に渡って学びを作り上げている。同コースの院生は、様々な学校へインターンシップに励んでいる。現在のインターンシップ生は、授業を実践することが少なく、参観者の立ち位置となることが多い。その中で、参観記録を取り、自身の学びや他者と記録を共有することで学びを日々深めている。しかし、記録は単に事実を書くだけでは学びとまらない。では、どのような記録、視点が自身の学びとなるのだろうか。そして、それぞれが考える「〇〇な力」の言語化に向けての活動が始まった。

記録に関しては、『授業研究～実践を変え、理論を革新する～木村優・岸野麻衣編』を参考に進められた。グループごとに進め方は変わるのだが、私のグループでは、同じ2年生の院生と話し合いながら、記録に対する不安や悩みを共有した後、文献中の内容を分担し、各自が資料を作成、発表、発表者の問題提起による議論というように進められた。このような進め方の意図は2つある。1つ目は、文献を読み込むことでさらに理解を深めるためだ。各自が文献を読み、議論するといった方法も多様な考えを生み出すかもしれない。しかし、自分たちのこれまでの考えや経験と深く関連付けることを重要視したいという思いがあったため、今回の方法をとった。2つ目は、授業を見る視点を明確にすることで、自身の子どもの像を言語化するためだ。記録は、参観者の個性が現れる。教師の発問や行動に注目したものもあれば、児童同士の対話に注目したものもある。だが、単に注目していても子ども像や手立てなどが明確になることはない。“意識”があることで、より記録をする視点が狭まり、

次第に無意識が言語化されるのではないだろうかと考える。以上より、記録の質を上げ、自分たちの子ども像をより明確にするということをねらいとして進め方が決まった。

しかし、この進め方が正しいとは限らない。同じ文献を検討しているが、グループによって進め方は大きく異なる。例えば、同じ授業を見て、記録を取り、共有し、記録の質を上げていく方法や議論を重ねることで自身にはない記録の視点の言語化を追求する方法など多様だ。そして、それぞれの班で学びが生まれている。

そうであっても、学びの価値を生み出すにあたり、常に“最適”が求められる。どうすればよい学びが生まれるのか。グループの一人一人が価値を実感できるためのよい学び方は何か。最適への方法は、正直、分かっていない。しかし、次第に学び方の良し悪しは結局「結果論」でしか考えられないのではと思うようになった。活動を終えて、周りとは共有、比較により批判的な見方はどうしても生まれてしまう。だが、この見方が生まれるのは、それぞれがねらいに沿って活動を実践したからこそではないだろうか。活動前において、自分たちの実践経験や理論でしか学び方を考えることはできない。だからこそ、“勇気”が鍵となる。一度やってみることで、新たな価値観に触れることができる。例え、批判されたとしても、別の視点へ目を向けるきっかけとなる。「やってみよう」という勇気。いい加減かもしれないが、学びを構成する考えとして、この“勇気”がマネジメント能力を培う第一歩であると改めて実感することができた。

また、今回の進め方による新たな疑問として、「学習の見通しを持たせることは本当にいいのか」が生まれた。確かに、見通しを持たせることによって、効

率よいかつ全員が共通理解したうえで遠回りしない学びを進めることができる。今回は、活動開始時にマネジメントの中心となる2年生より見通しに関する説明を行った。そのためか、1年生を中心に何をすべきなのか、どのように考えていくのかに悩むことなく、議論や資料検討に集中することができた。振り返り時には今回の進め方について「一番じっくりくる方法だった」という声も頂いた。だが、これは本当にいいのだろうか。学びを共に作り上げるにあたり、方法や進め方を全体で話し合い、共に価値づけていくことの方が学びを深まるのではないだろうか。今

後、予測不可能な社会で生きていく中、見通しというレールを引いて行う学びの方が力を身に着けることができるのではないだろうか。

私には、まだ、学びのマネジメントについての正解や明確な考えは生まれていない。しかし、活動を積み重ねる中で、活動の種類や進め方、ねらいの視点を増やすことができているのは事実だ。今後、どこまでマネジメントを突き詰めることができるのか。同コースの2年生で協力していくことも大事だが、私なりの視点を1つずつ増やしていきたい。

小学部でのインターンシップを通して

授業研究・教職専門性開発コース2年/

福井大学教育学部附属特別支援学校 加藤 もも香

附属特別支援学校小学部でのインターンシップが始まり、2ヶ月ほど経った。昨年度は中学部でインターンシップをしていた私にとって、小学部の活動は今までと全く違うものであり、初めころは子どもの実態を知ることや小学部という環境に慣れることで精一杯であった。

小学部に入ることになり、まず初めに衝撃を受けたことは、パズルや文字カード、マッチング課題に取り組むためのものなど、手作りの教材がたくさんあるということである。中学部で“勉強”というと、子ども一人ひとりが机に向かい、それぞれがプリントに取り組むというような姿が印象的であったが、小学部での勉強の時間は、プリントに取り組む時間というより、先生方が子どもたちに合った内容の学習をしているというような印象を受けた。また、小学部には「あそび」という、中学部にはない活動がある。「あそび」の活動がどのようなものなのか、というようなことも初めは分からず、子どもと関わりながら理解していくようなインターンシップであった。

現在小学部3組という、小学5・6年生のクラスに入っている。小学部3組であそびの活動や勉強を見ていくなかでの気付きや学びを報告していきたいと思う。

まず、勉強では、3組の子どもたちそれぞれの実態に応じた内容に取り組んでいる。5月には、ちょうどおはようタイムという朝の時間に鯉のぼりを使った題材をしていたことから、異なる色、大きさの鯉のぼりを使い、「赤色の大きい鯉のぼりはどれ？」などといった、色と大きさの判別などの課題を行った。また、文字の学習では、動物の名前や鳴き声を題材にした学習を行った。この時には、なかなか学習に参加できずすぐに教室を出て行ってしまいう子に対してどのように関わっていけばいいのか、と悩みながらの活動であった。最近では修学旅行に向けてお金の学習を始めた。お金の学習として、まずはお金の種類が分かるかどうか確かめるところからスタートした。すると、10円玉、100円玉などの硬貨の種類と実物が一致する子もいれば、硬貨のイラストを見てそれと同じ硬貨を出せる子などさまざまであった。教室で買い物ごっこをするなどして、机上での学習ではスムーズにお金を並べたり値段を

言ったりできても、買い物ごっこになると緊張してしまう子も多かった。

あそびでは、台車を使い、いくつかのコーナーを回って遊ぶ活動をしている。コーナーでの遊びを、どのようなものを入れるか、遊びのルールはどうするか、といったことを、子どもが自分たちで決め、遊びをつくり出していた。子どもたちの遊びの様子を見ながら、遊びのなかでの子どもたちの実態を把握し、捉え直していくことが必要であると感じた。

小学部でのインターンシップを通して、より子どもの実態を深く捉えることの必要性を感じている。特に、「あそび」のような自由度の高い内容の活動のなかで、子どもが何に興味関心があり何をしたいと考えているのか、ということを考えていくことが重要であると考え。どんなことを学んでほしい

か、といった教師の文脈と、どんなことを学びたいか、という子どもの文脈を重ねるための手立てを考えるために、子どもの実態を把握することが必要であることがわかる。また、お金の学習を行ったことで、プリント学習では簡単にできる子でも、実際にお金を支払う場面などで戸惑ってしまったり、困ってしまったりする子が多いことが分かった。生活の中で役立てていくためには、実際にやってみることが非常に有効であることが分かった。そこで、これから子どもたちと学習を行っていく際には、プリントなどでの机上の学習だけで無く、できるだけ実物を用いて学習していくことが必要であると考え。

これからのインターンシップでは、より子どもの実態の把握やアセスメントを深く行い、子どもの学びたいことを行っていけたらと思う。

合同カンファレンス・ラウンドテーブル報告

カンファレンスで学びは協働的に形づくられる

学校改革マネジメントコース2年/福井市国見中学校 吉田 清子

教職大学院生として2年目を迎えた。今年度の開講式は登学してのものだったので、今年はこのまま…と、期待したものの、やはりコロナウィルスの感染は収まらず、4月、5月のカンファレンスは相変わらずオンラインとなった。しかし、この5月カンファレンス当日朝、どうしても外せないPTA行事が入り、自宅からも大学からも、遠く離れた職場でぎりぎりまで仕事をして、そのまま勤務校で受講できたのは、オンラインならではの、ある意味効率的でいいなど、ICTの便利さを痛感しながら始まったカンファレンスであった。

テーマである「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」に沿い、グループ内で実践内容や課題などを共有した。

ストレートマスターのA先生は、インターンシップで勤務しているS中学校（筆者の前任校）で、専攻である特別支援学級での指導の様子を語ってくださった。前任校であるため特別支援学級の様子がわかるだけに、そのご苦労と、丁寧で真摯なお取組に、大変感銘を受けた。特に、今年の特学に所属する1年生3名は、落ち着きがなく、多動・他傷など、その対応は経験を積んだ教員でも音を上げるほどであるようだが、ただ厳しく叱責したり注意したりするだけでは根本解決にならないと、「なぜ、ここで立ち歩いてしまうのか」「なぜ、このときに別のことに意識がとんでしまうのか」と当該生徒に「なぜ」を丁寧に聞き取り、傾聴し、受容することで少しずつ彼らの変容がみられるようになったという取組は、学ぶべき姿勢と実践であると深く感動を覚えた。対話が必要であるのは、教員間だけではなく、生徒との間にも大変重要なことで

あることを改めて考えさせられる話題であった。また、ご自身が理科教員でもあることから、特別支援学級の生徒たちが、親学級と一緒に理科を学習できるように今後も支援していきたいという言葉に、明確な目標と生徒への寄り添う姿をうかがうことができた。今の状態だけでなく、生徒たちの将来像までをきちんと描いている点は、学ぶべき姿勢であり、色々なコミュニティに属して、生徒の話をお聴くという点についても、子ども一人一人の背景を捉えようとしている点も、素晴らしい、このような実践をうかがえたことは大変参考になった。

次に、それぞれクラスずつの小中一貫校の研究主任である U 先生は、学校が市の研究指定校を受けられ、子どもたちが意欲的に学べるようになるにはどうしたらよいか、9年間の学びを考えたカリキュラムで実践をおこなっておられるとのことであったが、昨年度からコロナ禍で思うように活動できていないという課題について共有させていただいた。教科書を教えるだけでなく、協働的な学びなどを実践したいけれども、2月に控えた研究発表会に向け、全校が一丸となっていない点を危惧しておられた。協働学習と単なるグループ学習の違いについての迷いや、各教科1名という中で教科の深まりもないことなども課題であるとのことであった。小学校と中学校で時間の共有も難しく、思いや実践内容の共有もなかなかできないと、先の実践報告で対比地教諭のお話にあったような悩みも抱えておられた。筆者の学校も、規模はかなり小さいが、一学年一クラスという点で共感できることが多々あった。そこで、確かに、教科の研究を深め、追究することは難しいかも知れないが、その分、学校全体での研究テーマや、課題の共通理解はより促進できるであろうし、ビジョンを共有して実践を積むこと

については、学校の大小に関わらず可能であるのではないかと意見をお伝えし、共感いただけた。

自身は、今年度異動したこともあり、異動時だからこそ見える学校の強みと弱みから、課題を洗い出し、そこから取り組んでいる実践について、話題共有させていただいた。小規模校としての課題を克服し、強みを伸ばさせるため、授業改革においては、指導案の提示を必要としない頻繁な授業公開と、必須の参観記録とその共有を行う。大学の先生方に全体研究会へ参加いただき、より多彩な視点での協議を推進する。また小規模校だからと手を掛けすぎていた事務処理は、その効率化を図るなど業務改善への取組についてご報告させていただいた。積極的な授業公開と参観への取組はいいが、記録を作成することに重きを置きすぎると、またそれがネックとなりかねないため、可能な範囲での実践が望ましいとのご示唆をいただき、研究主任との協働するなかで方向性を確認すべく持ち帰ることができた。

やはり、毎月の合同カンファレンスで、実践内容を語り合ったり、意見交換をしたりすることで、独りよがりの実践ではなく、より深まりのある研究実践になると痛感した。実践へ対しての意義づけや価値づけが行われたり、メンバーの実践をお聴くなかで、自身の実践も再構築されたりと、若手は若手なりに、中堅は中堅なりに、そして管理職は…と、様々な視点での意見交換は、自身の新たな気づきにつながり、学びの深まりに結びつく。そして、やがてそれはより充実した研究実践へと昇華されると感じた次第である。毎月の合同カンファレンスによって、実践は必ずやブラッシュアップされていくと痛感した。この貴重な機会を今後も大切にしていきたい。

探究的な学びにつながる試験問題の「おもしろさ」を考える

学校改革マネジメントコース2年/元福井県教育委員会 林 雅則

5月の合同カンファレンスでは「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」とともに「求められる学習と試験問題」がテーマにあげられ、柳沢研究科長からは、大学入試や「全国学力・学習状況調査」（全国学力テスト）、OECDの「生徒の学習到達度調査」（PISA）などにおいて、探求的な状況設定での問題が多くみられるようになっている現状を踏まえ、教師の学習観の転換が求められていることについて問題提起があった。紹介されたPISA読解力問題（ラパヌイ島における森林破壊に関する問題）などを見ると、問題を解いている子どもたちが、その内容に興味・関心を持ち、森林破壊原因の意外性に“面白さ”を感じ、もっと探求してみたいと思うかもしれないと感じた。そこで、ここでは、「おもしろさ」という、やや異なった視点で探究的な試験問題を考えてみたい。

そのカンファレンスから5日後の5月27日には令和3年度の全国学力・学習状況調査が実施された。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で2年ぶりの実施となった。小学6年生国語の問題を見ると、身近にある「面ファスナー」が国際宇宙ステーションでも使われているといったことに関する探求的な状況設定の問題も見受けられた。宇宙空間で身近なものが使われていることに普遍性という“面白さ”を感じ、学力テストが終わって、さらに国際宇宙ステーションで使われているものを調べてみたいと思うかもしれない。

ふと思い出したのが、私が県教育委員会に在籍していた7～8年前に経験した2つのことだった。1つは、全国学力テストについて。本県では、毎年、国に先立って全国学力テストの独自分析を行っていた。その年の小学6年生国語の問題に「五十歩百歩」の意味を問う問題があった。福井県の子どもたちの平均正答率からすると正答率がやや低かったため、要因を探った。すると、福井県のほとんどの市町で採択している教科書では本文で「五十歩百歩」が扱われてな

く、巻末に紹介されているのみであった。一方、正答率の高い県を調べてみると、その県で採択された教科書では本文で扱われていた。すべての都道府県の教科書とその問題の正答率を分析すると明らかに相関関係が見られた。いかに学校で「教科書を教えているか」が実証された。出題者はそうした事実も承知していたのだろうか？ましてや、単に学習した知識を問うだけでは、問題を解きながらも、子どもが学ぶことの面白さを感じることはできないだろう。

もう一つは、高校入試について。試験問題の妥当性の点検は、事前には特定の作問者に限られ、入試が終り、特に出題ミスや正答率分布等に異常値がなければ、それで一件落着となる。しかし、本県の入試問題にはどのような課題があるのか、改めて検証すべきではないか。入試問題に精通している各教科の専門家にも加わってもらい事後精査を行った。英語の検証会議でのこと。入試問題に詳しい専門家から「入試問題であっても、受験する子どもたちが問題を読んで、“なるほど”とか、“そうか”と興味を持って、楽しむような問題であってほしい」と指摘を受けた。当時、本県の英語の入試問題は内容もさほど面白くない超長文の問題であり、時間をかけて読んで7～8題の問いに答えなければならない。これでは入学試験が苦痛になり、入学後の学びへの“面白さ”は感じられないだろう。

こうした過去のことを思い出しながら、カンファレンス後の6月5日に、福井大学教育学部附属義務教育学校の研究集会に参加した。今年はオンラインでの開催に合わせて、新しい試みとして子どもたちもセッションに参加していた。社会科のセッションで、ある先生が「社会科の授業は好きですか？」と尋ねたところ、参加していた後期課程の女子生徒二人が「M先生の授業はとても面白いので大好きです！」と揃って即答。私からも「じゃ、テストは楽しいですか？」と尋ねると、「難しいけど、考えるのが面白く、

楽しいですよ！」とうれしい返答があった。授業だけでなくテストも、チャレンジしながら楽しんでいる。

探究的な学びには、学ぶ者が課題を自分事として捉えることが必要だが、そのためにはその課題を面白く感じる必要があると思う。試験も、これまでの知識を試すだけでなく、次にはもっと知りたい、調べてみたいと思うような気持ちにつながる“問いと答えの長い”課題であってほしい。デイヴィス・マレーという社会学者が『That’s interesting』という論文で、知的な「おもしろい」には12通りのパターンが

あると指摘している。無秩序だったと思われていたものに秩序を見出すとおもしろいという「組織性(Organization)」や、共存しないとされていたものが共存しうるとおもしろいと思う「共存性(Co-existence)」はじめ、普遍性(Generalization)、反対性(Opposition)、相関関係(Co-relation)など「おもしろい」の要素を分析している。子供たちの探求的な心を動かすような「おもしろさ」を授業や試験に取り入れることについても協働研究で取り組んでみてはどうだろうか。

聞くこと、話すことの大切さの実感

ミドルリーダー養成コース2年/町田市立武蔵岡中学校 菅野 多岐子

5月のカンファレンスは、今後どのように生徒と向き合っていくべきかを改めて考える時間となった。中でも対比地教諭の実践報告からは、自身の課題に気づききっかけとなった。それは次の事柄である。

- ①ICTを用いた協働的な学びの可能性を教科を超えて探ること
- ②協議や共有する時間の確保
- ③聞くということ（他者へのリスペクト）
- ④失敗を学習の材料とする仕組み

これらを現状に置き換え省察したいと思う。本校は、今年度より本格的に生徒1人につき1台のchromebookが配布された。それを受け、各教科ではchromebookを用いた授業展開が求められている。これまで紙面上や黒板で行っていた教育活動からICT機器を用いた教育活動への変化は、教員に不安が伴うスタートとなった。一方で、職員室の光景に変化が現れてきたのも事実である。空き時間には、互いに練習をし合う姿が見られるようになった。しかし、いざ授業で使用するとなると思い通りに使用できなかったり、黒板の代わりとしてしか使いこなせなかったりと、「ICTを用いた協働的な学び」に辿り着いていない状況にある。そうした時、周囲との雑談から思い

がけないヒントを得ることがある。得意な教員が「この機能を使ってみるといいですよ。」と教えてくれたり、苦手同士で「こんなことをしたいんだけど、いい方法はないか」と話していたりと、ちょっとした誰かの発言が広まり次第にそれが教員同士の協働・探究になっているように感じる場面が増えたのだ。教職大学院に入学して以来、雑談という名のたわいもない会話が教員間でも教師と生徒間でも、互いの理解を深め信頼関係を築くにあたり非常に有効であることを実感していたので、それが校内でも起き始めたことを嬉しく感じている。

その反面、協議や共有する時間の確保という点では、時間が足りていない。また個々が抱える仕事も多く、雑談をする時間も満足にとれていない。聞くということに通じるが、様々な経験と知識をお持ちの先生方の考えを、どれだけ沢山お話いただく時間を大事にできるかということに意識をおいて過ごすことがいかに大切であるかを考え直すきっかけとなった。

さらに、4月から総合的な時間の学習を通じて実践している協働・探究学習では、失敗を恐れず挑戦する年度にしたいという思いが強い。1年間を通じて大枠のテーマを企画し協働・探究学習に取り組む挑戦は、本校にとっても私自身にとっても初めてである。取

組の中で、生徒の自由な発想はこちらの想像を超えていることがある。ある日の授業中、私は生徒の質問に答えられずにその生徒とともに考え込む場面があった。このような困難にぶつかった際、互いの思いを聞くことの大切さを実感したのだった。何故そう思ったのかをじっくり聞くこと、また相手もこちらの思いをじっくり聞くことで、互いの思いが重なり合う部分が見えてきたり、そこから新たな考えが浮かんだりしてくるものなのだ。そして、じっくり聞くことは相手を理解することにも通じるのだと感じた。また、その時の私は予想外の展開に焦りや不安よりも楽しさの方が大きかった。それは生徒も同様だったように感じる。ともに「ああでもない、こうでもない」と話し合うことで思考が深まり、1人では見出せない解が見つかった。その様子を収めた写真を見返すと、生徒の表情が輝いていた。生徒や学年の教員と

考えたり、アイデアを出し合ったりする時間は非常に楽しい。この楽しい気持ちは、大人にも子どもにも伝染するものだと実感した。未知なることとの出会いに対する不安よりも、これから始める事への期待や好奇心・向上心が勝る時、楽しい気持ちが湧いてくるのだと思う。それは、毎月のカンファレンスも同様だ。M2となった今、私が感じているカンファレンスでの学ぶことの楽しさを所属校の先生方にも感じてもらえるきっかけになればいけない。きっとこれからも様々な戸惑いや失敗と出会うことになると思う。失敗というと良くないことと思いがちだが、失敗があるからこそ振り返り、その失敗が生徒同士や生徒と教員の協働・探究のきっかけにもなることを経験した今、そして今後は楽しいから一歩踏み込んで、思考と学びが深まるような問を発進していきたいと思う。

他校での協働研究を学ぶ

ミドルリーダー養成コース2年/新潟県燕市立分水中学校 牛腸 つぐ実

5月のカンファレンスの最初は「実践報告」であった。昨年度の実践報告は、福井大学教育学部附属義務教育学校の報告であった。コロナ禍の中で、年度当初の苦労をICT機器を利用して乗り越えていった印象的な実践報告であった。今年度は東京大学教育学部附属中等教育学校の報告。今回の発表で、去年の私と同様に感激する院生の方がたくさんいらっしゃるはずである。その実践報告は「走りすぎた。」の言葉で始まる苦労の連続の話であった。私が報告者である先生に抱く姿は、ICTにたけていて何でも完璧にそつなくこなすというイメージであった。私は先生の普段を垣間見た気でいたが、一部分しか捉えていなかったことに気付かされた。発表者の先生の違う一面に気付けたことから始まる視聴となった。先生は以前、ご自分の勤務校での公開研究会のことを書かれていた。研究部長として、初のオンライン公開研究会を行なうことができた要因の一つに、東京ラウンドテーブルの実施が挙げられていた。また今回

の実践報告では、研究会の成功に①協議や共有する時間の確保。②具体物での共有。③安心と危機感。が綴られていた。そして今後の展望として「失敗を学習の材料とする仕組み」について述べられている。私自身、生徒によく言う言葉で「教室は失敗するところだよ！」が浮かんだ。失敗は成功のもとである。しかし私の周囲には、失敗が許されないと考えている方が多くいる。教師の失敗は効率を下げ、教師としての信頼を落とすと考える人がいる。生徒の失敗は成就感をさまたげ、自己肯定感を下げることになりかねないとデメリットを口にする人がいる。確かに一理あるが、失敗のメリットもあるはずである。私たちの学校は、失敗が許されない緊張した空間になっているのではないか。今回の実践報告を受けて、自校の課題に触れることができた気がした。

午前のセッションは、「特別支援の生徒と向き合っ
て」と「サイエンスラボと缶サット」であった。「缶
サット甲子園」を「缶サット」と聞き間違えていた

ことに気付く。「宇宙兄弟(漫画)の…」と発言したことから話が発展して行き、間違えがかえって場を盛り上げることになった。グループセッションは単なるトークではないが、間違えをきっかけに、学びが発展していく様を実感できる瞬間となった。認知している知識だけでは進まない語りもある。話を掘り下げて確認することで、逆に膨らみを増すことができる時があることを知った。経験知は大切であり、深い学びのためには更なる学びが必要であることを実感した瞬間であった。

午後の学びは「資料を読む」で始まった。入試改革について資料を読み解く。私は何年も前から「入試が変わらなければ、学校での学びも変わらない。」と呟いていた気がする。いよいよその時代がやってきたと実感した。だが本県の公立高等学校一般選抜入試問題を見る限り、まだ課題が多いと感ずる。しかし、今回の資料は目を引いた。現代社会の倫理の問題の間1は、幅広い知識と見聞が17、8歳頃の青年に求められていることを実感する。お茶の水女子大学「新フンボルト入試」、早稲田大学「新思考入試」、そして東京大学法学部「学校推薦型選抜」は、時事問題としても必要な知識や近い未来に生きる新しい生活に求められている諸問題に、どのように対応していくかが問われていた。暗記したものを答えるだけの時代は終わりを告げようとしている。コンピュータが身近になった今こそ、人間にしかできないことが求

められる。中学校教師として更なる学びが必要となることにワクワクするばかりであった。

最後は「クロスセッション」である。選択した資料を読み、語りを聴き合った。私が選んだ資料は「学年プロジェクト(福井大学附属義務教育学校)」である。「3年間を見通した学年プロジェクトの始まり」と副題が付けられていた。読みたいと思ったきっかけは、私自身が1学年主任であり、今年度の「総合的な学習の時間」、「1学年委員会」の主担当であったからだ。分水中学校で生かせる教材を探りたかった。私の頭の中に刺激を与えてもらい、次に生かせるヒントが欲しかった。実際に本校でどれだけのことが可能かは分からないが、「学年プロジェクト」は挑戦したい内容が満載であった。主題を協働的に追求し、学校全体を「探究するコミュニティ」へと導いて行くのだ。本校の生徒は、総合的な時間の学習をあまり楽しみにしていない。保護者も同様である。福井大学附属義務教育学校とは土壌が違うかもしれないが、分水中学校のはじめの一步を私たちの1学年で踏み出してみたいと考えている。そのためにも、学びのストーリーとして「計画ー実践ー振り返り」の一連の活動を体験し、「探究・協働・省察」を我が中学校でも深く定着させて行きたい。そして「社会創生プロジェクト」にもおおいに興味がある。タイミング良く6月5日(SAT)に福井大学附属義務教育学校の教育研究集会が開催された。参会者となり、更に学びを深めたものだ。

大人も子供も分からない、それがいい

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学附属義務教育学校前期課程 村林雅也

『大人も子供も分からない、それがいい。』5月のカンファレンスに参加しながら書き留めたメモを見返したとき、真っ先に目に飛び込んできた言葉である。教職大学院3年目を迎える今年度。私は院生として学ぶ傍ら、小学校の非常勤講師として勤務を始め、教員として歩み出すこととなった。これまでの2年間、インターンとしていくつかの授業を実践する

機会をいただいていたものの、毎日のように実践を重ねていく生活には未だ慣れず、「明日の授業はどうしよう。」という葛藤を繰り返す日々である。

GIGA スクール構想、ICT の活用などの言葉がよく聞かれるようになり、昨今の学校現場では情報機器の活用が盛んに行われるようになった。1人1台のタブレットが導入され、授業場面でも積極的に活用し

ていくことが求められている。20代の私ですら、小学校や中学校に通っていた頃にはなかったことである。私もタブレットを活用した授業を実践してみようと思いついて準備を始めるものの、Wi-Fiの設定に手間がかかる。アプリが上手く作動しないかもしれない。Airdropってどうやったらできるのだろう。面倒なことや難しいことばかりが立ちはだかっていた。授業で子供たちがタブレットを手にするときに、どのようなルールで活動すればいいのだろう。それすらもよく分からない。この葛藤についてグループの先生方に紹介したときにいただいたのが、冒頭の言葉である。

大人の方が子供よりも詳しくなくてはいけない。大人が子供に一方的に教えなければいけない。こんな発想はしなくても良い。分からないのなら、子供と一緒に学んでいくという姿勢が大事なのではないか。同じグループでお話しした先生方からこのようなア

ドバイスをいただいた。思い返してみれば、授業をするときはいつも「私は大人なのだから子どもよりも詳しくなければいけない。」「私が知識を持っていないとどうするのだ。」と無意識にも考えてしまう自分がいた。これから先求められる学校や授業の姿は、教師が一方的に教える形でもなければ、必ず大人の方が子供よりもたくさんを知っていなければいけないという呪縛でもないだろう。この度のカンファレンスでは、新しい大学入試についての話題も提供された。大人が知っていることをただ子供に教え込むという学びのあり方だけでは、新しい時代に必要な力は身に付いていかないだろう。無論、教材研究を大切に、子供たちの学びを確実にコーディネートできるようにするための準備は怠ってはいけない。ただし、子供と一緒に学ぶ姿勢を大切に、子供たちと一緒に学びを作り上げていく。大人も子供も分からないことをむしろ好機と捉えて一緒に追求していく。この心構えは忘れないようにしたい。

5月合同カンファレンスを終えて

学校改革マネジメントコース2年/和田こども園 髙谷 浩太郎

5月の合同カンファレンスは、「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」というテーマでオンライン開催となった。最初に、「オンラインカンファレンスを協働的な学びの場とするために」という笹原先生からのお話があった。開かれた場・公的な場で実践を語ることが大切であり、聴き手の存在・応答により、新しい気づきがあり、実践が意味づけされる。そして、オンラインは時空を超えたコミュニケーションを可能にするが、聴き手の存在を感じにくく、私的空間化になりがちな難点があるということだった。また、東京大学附属中等学校の對比地先生の実践報告では、「日常を取り戻すこと」と「変革」の狭間で「GIGAスクール構想」への取り組みを試行錯誤されているとのことであった。

当園では、本年2月に保護者との個人懇談をZOOMで実施したところ、懇談のポイントが絞られ定めら

れた時間内に各保護者との懇談を終えることはできたものの、必要最小限のコミュニケーションしか取れず、保護者との関係性向上の手応えは少なかったようである。社交辞令的なあいさつや本題とは全くかけ離れた雑談も、関係性を深めるためには大切であることを実感する結果となる。もう既に信頼関係が築かれている保護者とのオンライン懇談は良しとしても、これから関係性を築くべき保護者やコミュニケーションの取りづらい保護者は、やはり対面で懇談するなど使い分けが必要で、今まで当たり前だった対面でのコミュニケーションの重要性を再認識する。コロナの影響でICT化が飛躍的に進化した身近なものとなってきており、業務効率化のためのICT化推進は必要だと思う。しかし、あくまでもICT化は何かの目的があって、その目的を達成するための手段であることを忘れてはいけないと思っている。身の回りのことでICT

化により効率化が図れることはないか日々模索しながらも、ICT化によって大切なものを失うことが無いように気を付けていきたい。

午後からは、柳沢先生より「求められる学習と変わる試験問題」についてのお話があり、全国学力・学習状況調査・大学入学共通テスト（新テスト）試行調査等の問題を踏まえ、学習観の転換が試験問題にまで及んできていることを知る機会となった。共通テストの現代社会「倫理」の問題が、高校生の「恥」について交わした会話、協働探究の授業場面が設問になっていたこと、また、全国学力・学習状況調査の小学校第6学年「国語B」の「事前に準備したインタビューメモ」と「インタビューの一部」を読んで問いに答えるという問題では、設問の文脈を追って探究を進め、文章中からの答え探しではなく問いをどう深めるかが求められていることなど、私の学生時代とは試験の中身が全く違ってきていることに、正直驚いた。また、「ラパヌイ島の問い」では、不確かな情報、たくさんの資料の中から必要な情報を得ること、資料の意味や価値を踏みとする経験の積み重ねが求められる問題であるとのことであったが、資料の中から答え探しをしなければと思い込んでいる私には、かなりの難問である。東京大学法学部「学校推薦型選抜」では、課題を読み、ディスカッションにより到達した結論をまとめることで、論理的思考力、発想力、コミュニケーション能力、チームで作業する能力などを審査している。早稲田大学の新思考入試では、事前に課題レポー

トと活動記録証明書を提出させ、提出した課題レポートの内容を振り返り、課題レポートの内容の優れた点と課題だと思われる点を具体的に説明することが入試の設問になっており、タフな探究実践と表現力が求められている。そして、お茶の水女子大学「新フンボルト入試」は、時間と手間をかけてじっくりと学力以外の受験生の資質・能力を見る入試で、求める人物像の中に、「本学の勉学に強い意欲があること」、「様々な事象に強い知的な好奇心を持ち、課題を自ら発見し、粘り強く探究していく力、独創的な解を導けるような能力を備えていること」とあり、具体的な事柄には、「知識や意見を人に伝え、実践するためのコミュニケーション能力や応用力を備えていること」、「真理の探究と価値の創造に対する憧憬と幅広い興味・関心を持っていること」とある。「意欲」、「知的な好奇心」、「探究心」、「コミュニケーション能力」、「憧憬と興味・関心」等々、まさに私たちが幼児教育の分野で、園生活や遊びを通して子どもたちに育みたい資質・能力と重なっていることに喜びを感じた。

4月のカンファレンスでの「令和の日本型学校教育」による国レベルの教育改革と当園の目指している変革の方向性が同じように感じられたこともあいまって、切り開きつつある新しい道へ自信を持って突き進めそうである。引き続き、教職員みんなで力を合わせ試行錯誤しながら、子どもの学びと教職員を支える環境整備に尽力していきたい。



2008年4月に福井大学教職大学院がスタートして14年目を迎えました。スタートと同時に『教職大学院 Newsletter』第1号が発刊され、本号で150号となりました。そこで、150号の発刊を記念して、これまでに教職大学院で学んだ先生方、現在学んでいる院生の皆様にお集まりいただき、座談会の形で、対話の中から、教職大学院がこれまで大事にしてきたものを探究しました。

「教職大学院の学びが育むもの」



(2021年6月9日 二の宮キャンパスにて)

【参加者】

川崎正人氏（1期生2008年度修了、現在福井県教育庁義務教育課長）

野尻友佳子氏（7期生2014年度修了、現在丸岡高校教頭）

荒木裕里香（授業研究・教職専門性開発コース在籍）

三上泰生（授業研究・教職専門性開発コース在籍）

大橋巖氏（1期生2008年度修了、現在、連合教職大学院スタッフ）

聴き手

橋本久代（連合教職大学院スタッフ）

カンファレンスの意味するもの

橋本：まず大橋先生、13年前を思い出して、そのころどんなことを期待し、感じていたか？また、久しぶりに戻ってみて今どう感じていらっしゃるのでしょうか？

大橋：13年前、隣にいる三上君の母校である至民中学校が移転開校した年に私は入学しました。平成20年に教職大学院ができる、それまで夜間主と言うのがあって、福大附属の先生方が行かれているというのは知っていましたが、今度は附属以外の公立の学校からも入学できるようになると聞きました。そこで、その拠点校となる至民中学校からも院生を出すことになり、「お前がいけ」と言われました。しかし、当時の私は部活動指導に燃えていて、バレーをやっていた自分は正直、面倒だなと思っていました。

今から思うと、NL50号でも少し書かせてもらいましたが、教職大学院での学びは「現代版寺子屋」だと思いました。この教職大学院は、「読み、書き、語る、聴く」という繋がりの中で学んでいくというのが、最大の特徴。院生の皆さんも今、難しい架橋理論などを読んでいます。『コミュニティ・オブ・プラクティス』など横文字ばかりの本を読み、それから伊那小や堀川小などの子どもの学びを中心にした実践記録を読み、レポートを書き、そしてそれを語り合う、その繰り返しでした。懐かしくてつい持ってきてしまいましたが、最終的には長期実践研究報告書という立派な冊子にまでしてもらえる。その時は何も思わなかったけれど、今振り返ってみれば、これらが全てつながっているなと思います。理論書や実践記録にしても何でも読めばいいというわけではなくて、ある筋で終始一貫繋がっているわけです。それらを今も後輩たちは読んでいます。今回の学習指導要領でも注目もされていますが、やはり教職大学院が大事にしているのは「探究」だと思います。院生自身にも探究的な学びを教職大学院の中で経験してもらおう。その中で何をねらっているかなど考えると、ストレートマスターの院生さんならこれから教員になっていく上で、探究を重視するという教育観を培おうとしている。現職の院生さんの場合には、今までの自分の教育観や指導観を問い直して「探究」を大事にするという教育観を培おうとしているのではないのでしょうか。私はたった1年間でしかたけれど、ここでの学びが今の自分に大きな影響を与えてくれていると改めて感じています。

今度は、十数年ぶりに戻ってきて、伴走者として院生の皆さんに寄り添う立場になってみると、やっぱり流れてい

るもの、大事にしていることは時代が変わっても一緒に、普遍的なものが流れていると感じています。ただ、自分達の頃と比べると、より充実しているし、今の院生さんが羨ましい。私らの時に今のように頻繁にカンファレンスってありましたっけね、川崎先生(笑)。そんなに頻繁に院生同士で会うことがなかったように思います。当時の至民中では毎週のように研究会があって、大学の先生方も参加してくださいっていました。しかし、私個人に何かを直接指導してくださったという記憶はあまりありません。学校全体の研究に淵本先生や木村先生、松木先生にも参加していただいて、夜遅くまで一緒に学校の研究について考えていただきました。その中で自分は間接的に様々なことを学んでいたのだと思います。

橋本：カンファレンスがなかったんですね。

荒木、三上：知らなかった(笑)。

橋本：では、今現在のことを聞いてみましょう。三上さん、この大学院に期待をして入ってきていると思いますが、今どんな良さを感じていますか？

三上：自分が受けてきた教育が70分授業のクラスター制で受けてきた。そのような中でも自分が覚えている大きなものはやっぱり授業です。自分が数学の教師を目指したのは、牧田秀昭先生に数学を教わって、数学が楽しいなと感じたから。当時から数学は得意だった。公文に通っていたこともあり計算が得意だった。それが誇らしかった。だけど、それだけじゃないんだよ、数学の本質ってそこじゃないんだよということを感じた。授業の中でグループで協働探究をする、70分かけてゆっくり、理解に差がある仲間とともに、ものを作り上げていく感覚を数学ですごく感じて、僕はそこから数学の教員を目指すようになりました。

そこで大学に入学して、探究的な学びを子どもたちの中で生成するにはどうしたら良いのだろうと、自分の中で常に軸として置いてきました。学部の授業の最終レポートも探究のよさってなんだろう、探究の魅力ってなんだろうということを軸にした。やっぱり受けてきた授業が面白かった。だから自分もそういう授業を子どもたちと共に創り上げたいという思いが強くなりました。

なぜ教職大学院にきたかという、授業は大学の4年間で学んできて、子どもたちとなんとなくやっていけると思ったんですけど、その評価ができないなと思いました。自分が受けてきた教育の中で、やっぱりテストで評価され

ているなと感じてきた。探究的な学びを授業でやっている割には、最後に個人の百点満点のテストでたぶん評定をつけられているんだろうなと感じてきた。その感覚を、今の子ども達には感じてほしくない。その壁を乗り越えたくて、探究的な学びの評価を軸にやりたいと思っています。

また、大学は授業を見る機会が少なかった。僕はたまたま、大橋先生にお声がけいただいて、進明中で授業をみて尊敬する授業に出会った。尊敬する先生の授業に出会えるチャンスが意外に大学4年間で少ないと感じていました。だから、もっともっといろんな先生の授業を見たいと思った。それは教員では難しいのではないかと感じました。ここの教職大学院の長期インターンシップといういろいろな先生の授業を見られる立場は、自分の学びに生かせるのではないかと感じて教職大学院を選択しました。

橋本: ここにきて大正解ですか？

三上: はい。カンファレンスで自分を問い直す機会が毎週のようにある。自分の中でやりたいことが決まっていた、がむしろいっていきたくて、「ここどうなの？」と今の仲間が問い直してくれる。意外と自分の中で分かりきっていたけれど、周りに伝わらないなと感じる。きっとそれは教員になっても同じで、自分が独りよがりの研究をしても、周りに伝わっていかないんだろうなと、学校や教育を変えようと思ったら仲間の力が必要だと思う。今のカンファレンスは、僕にとってすごくありがたい時間だなと思っています。

長期インターンシップの中で何が培われていくのか

橋本: ありがとうございます。カンファレンスがあってよかったですね。次に、荒木さんが期待していたこと。ここでの学びについて教えてください。

荒木: 私が期待していたことは、大学で教員免許を取るために1ヶ月、教育実習をしたんですけど、学べたことは何だったのだろうという気持ちがありました。あまり生徒と関わらないでくれと言われて、とにかく学習指導案と授業だけして欲しいと言われた教育実習でした。教員になるのに、自分は学校のことを何も知らなかった。このままでは学校現場には行けない。力不足だと思っていました。もっと学校のことを知りたかった。そんな時にこの大学院には長期インターンの制度があることを知り、ここを選びまし

た。もっと学校の中で、いろんなことを学びながら教員としての力を培いたいという期待がありました。

良さは、思っていたように学校現場の中で実際に学べる事が多く、先生方と関わったり生徒と話したり、授業も長期的に見ることができ、自分もすることができます。インターンシップ以外にも、私たち学部卒の院生は、週間と月間のカンファレンスがあります。特に週間カンファレンスでは、今まで自分がいかに協働して何かをしてこなかったのかを思い知るくらい、すべてが協働という思いで、「あっ、協働とはこんなふうにするのか」ということを学んでいます。

また、自分は探究的な授業も受けて来なかった。どちらかという、知識伝達、講義型という授業を受けてきた。その中で、今自分たちがしていることが探究だと思ったり、それを生徒の前で授業するとはどういうことなのかを悩みつつ、仲間と一緒にわいわい議論しながらやるのが本当に面白いなと思っています。そんな良さがあります。月間カンファレンスでは、普段は、他の学校の先生と話すことがないので、他校の先生と話すことだったり、学校の先生ではない方と話したりすることで、自分とは違う視点、自分では得られない視点を得られるので視野を広げる意味でとてもいいなと感じています。

橋本: 荒木さんの場合は、単身で丸岡南中にいって、例えば附属の場合ならたくさん院生がいるんだけど、そんな中で困ったこともきっとあったと思うのですが、満足して学べているのでしょうか。

荒木: はい。本当に初期、1学期くらいは大変という思いもありましたが、先生方もそんな私の立場を理解してくださって、「インターン生にはこんな仕事できるな」とか「荒木さんならこんなことが任せられるな」とか、だんだんと先生方との関係ができてきました。同じように生徒とも「先生じゃないけれど、こんな先生なんだな」と、生徒も私のことをだんだんと理解してくれました。時間ということが重要だったと思います。充実しています。

橋本: では、修了生の話を聞いてみたいと思います。今聞いていても驚いたこともあるかと思いますが。また、修了後、ここでの学びがどう生かされたのかなど、お話しいただければと思います。

野尻: まず私のいた頃のことを紹介させてください。学部卒院生が15名、現職教員が20名おりました。35人すごく

仲が良く、学部卒院生から学ぶことも多かったです。他教科他校種、また教員ではない方、そのころから県外の方もたくさん入られるようになりました。カンファレンスもやっていたし、そんな方々との交流が良かったなという思いがあります。

そして、現在丸岡高校は、インターンシップの院生3名に来てもらっています。それは校長先生と私の考えが共通していて、今まで教職大学院に関わってきて知っていたのですが、小中学校にはたくさんの院生が来ていて、でも高校は、ほぼいなかったんです。インターンシップ生に学校に入っていただくということが、学校にとってすごく良いということが分かっていたので、是非お願いしますと希望したら、なんと3名も来てもらいました。今日もちょうど、1時間目に校内カンファレンスでその3人と、現職の一人と私の5人で話してきました。まさに今、荒木さんと三上さんが仰っていたことと同じことを本校の3名も言っていましたのでよかったです。

当時のことで私が本当に良かったなと思うのは、人の力を信じるようになったことです。それまで私は、すごく自分に自信満々で、クラスは学級王国、授業は自分一人で作り上げるのが当然、教材なども全部一人で作るのが当たり前という感じでした。教職大学院で、協働することの良さ、楽しさを実感できたと思います。ちょうどその時に国語科3人でコラボして授業を組み立てていったのですが、そんなことは、絶対にここへこなければできなかったと思います。その頃、探究ということにもみんなまだ懐疑的で、附属でやっていらっしゃることも「附属だからできるんだ」という考え方が多かったのだけれど、その頃からだんだんと浸透してきて、今は高校も探究一色になってきています。そういうことに関われたということもすごく良かったと思います。

記録ということの大切さも学ばせてもらいました。毎月、まとめることも大変だったのですが、それを残しておくということで、振り返って省察する。そんなことがすごく重要だったなと思っています。マイナス点があるとすれば、その後現場に戻れなかったことでしょうか(笑)。

それでも、その後どんな職場に行っても、教職大学院で学んだことは役立つという実感はありますね。

橋本: 国語で3人でコラボという話がありましたが、他のお二人を野尻先生が引っ張って行かれたということですか？

野尻: お一人は、当時のミドルアップ研修の受講者で感覚が似ていました。そこに、もう一人を引き入れて。目指すものを共有できる人が二人いるとすごく力強いと感じています。

橋本: まさに実践されていたんですね。



「探究」「省察」「協働」…その後の私に残るもの

川崎: 教職大学院での初日、確か4人で話したんです。中学校の教員が二人と、大学院の先生がお二人。その大学院の先生から「中学校の先生って探究の授業なんてしないんですよ？」と聞かれました。「高校入試に向けて点数を取れるようにすることが、普段の授業の中心になっているんじゃないですか？」と言われて、「いえいえ、常にそれが自分の中のジレンマなんです。点数も大事ですけど、探究的な学びもさせたいというのがジレンマなんです。」という話をしました。中学校にいた私の中では、生徒指導、部活動指導、進路指導の優位性が結構高く、学習指導がややもすると下位の方になってしまい、教え込みになりがちでした。そういう状況で自分が葛藤している中で、子ども達が学校生活の中で一番多くの時間を費やしているのは授業なので、教員は授業を第一に考えなければならないことを認識直させてくれたのが教職大学院でした。

さきほど「省察」という言葉がありました。今日ここに来るにあたって、自分の長期実践研究報告書を読み返してきました。大学院で学ぶまでは、省察という習慣が自分の中にはありませんでした。授業をしても、例えば子どもに感想を書かせたり、テストをしてその結果を確認したりして、それを自分の授業の評価としていました。ですが、省察というと、授業後に子どもの姿から学びを捉え直します。さらに、長期実践研究報告書を書いた半年後に授業後とは違う見取りをしたり、昨日も読み直して、13年前とは視点を

変えてもう1回考え直したりすることができるのです。この13年の間に自分自身の教育観が変わったところで、改めて当時の授業を振り返り、新たな気付きを得ることができます。大学院では、省察することの意義と姿勢について学ぶことができました。

それから、報告書を書く時に「ナラティブに」と言われて、この言葉も初めて聞きました。それまで私は研究紀要などを、研究仮説や研究主題を立て、それに伴う実践を行い、そして最後にこんな成果があったけれど、一方でこういう課題もありました、という流れで書いていました。けれど、長期実践研究報告書には、なんでも書けばいいというか、むしろ、どんな失敗があって、どんなところで苦労したという記述が、読み手には参考になるのです。そういう記録の残し方も大切だということ気付かせてもらいました。

大学院で学ぶ中で自分自身が変わったと思うのは、視点を変えて子どもを見る、物事を見るということです。授業について、それまでは教科を見るという視点でした。私は理科の教員ですが、あの実験はこうすればうまくいく、それよりもこっちの実験の方が生徒は理解しやすいとか、その発問よりもこう問うべきだったなど、教員の指導方法を中心に授業を見ていたと思うのです。子どものつぶやきや考え方の変化などを見取るというように、子どもを主体とした授業の見方に変わっていったのは、とても大きな変化だったと思います。今日のこの会は、院生として、修了生として、読み手として、という目的がありますが、このように立場を変えてものを見ることも大学院で学べたことだと思います。

もう一つは「協働」。この言葉も初めて使いました。自分の学校で何をどこから実践しようかと悩んでいた時に、客員で来られていた岡山大学の先生から、「できることからやればいいんだよ。」とアドバイスを受け、若い先生と私の3人で「Mの会」という会を作りました。「学び合い」のMです。3人は、同じクラスの国語、数学、理科の授業を担当していたので、教科を超えて生徒の学びの姿を見取ること、教師どうしの学び合いを始めようと考えたのです。

また、私の学校には1か月か2か月に1度、大学院の先生が来てくださっていました。「僕の学費は1人では元を取れそうもありません。全員で研究しましょう。」と、ある日の職員朝礼で声をかけました。それがきっかけになったのかどうかはわかりませんが、その後、学校の研究主題に

沿った実践や、総合的な学習の時間における新しい取り組みが進んでいきました。みんなで同じ方向に向かっていることを実感し、心地よかったのを覚えています。

もうちょっとしゃべってもいいですか、

橋本：どうぞ(笑)

川崎：長期実践研究報告書の下書きを提出すると、大学院の先生がいっぱい付箋をつけてくださって、「こんな視点で考えてみたら」とか「こういう表現の方が分かりやすいのでは」などのアドバイスが書いてありました。清書した後、下書きを捨ててしまおうかと迷ったんですが、妻から「それはあなたの1年半の学びの過程なので、残しておいた方がいいと思う。」と言われ、今も自宅に残っています。その付箋を貼ってくださったのが淵本先生でした。

淵本先生とは、その後同じ職場で仕事をする事になり、今は、当時の学部卒院生でグループで話し合ったこともある先生が指導主事として一緒に仕事をしています。どちらの方とも、細かく説明しなくても言いたいことが伝わっていると感じる事が時々あります。

橋本：同じ教職大学院で学んだというのが以心伝心なんですね。

川崎：いろいろな人や本と関わりながら教育観が肉付けされていきます。大学院で同じ1年半を過ごすうちに、同じものが肉付けされていて、それが共鳴するということのかなと感じています。

橋本：ありがとうございます。僕も言いたいなという顔をされている大橋先生、何か思い出されましたか。

大橋：みなさんのお話を聞いていて、改めてすごいと感じました。どの先生方からもなんですが、まず教え子の三上君から「探究」という言葉がパッと出てきたのがものすごく嬉しかったです。自分たちが至民中で取り組んでいたことが中学生にもちゃんと伝わっていたことを知ることができたからです。そして三上君は、それを大事にしながら、自分が教員になった時にも、探究的な学びを「どう作るか」を考えていきたいと語ってくれています。しかも、そこにとどまらず、それを「どう評価するか」というところまで考えていて「すごい」と思いました。

それから皆さんの中から「探究」、「協働」、「省察」という言葉が何回も出てきました。この言葉を皆さんが語る、このことがすでに共通の文化となっていて、まさしく同志

になっている、そのことがこの教職大学院の学びの凄さだと感じました。「何を学びましたか」と聞かれた時に、そういう共通する言葉がパッと出てくるなんていうことが、私はすごいことだと思います。

先日松木先生が、これからの教師教育は、コンテンツ重視からコンピテンシー重視なんだと言われ、その資質・能力を育てていく、大学の教師教育のカリキュラムを福井大学は提案していくんだとお話しされていました。まさしく「協働する力」や「探究する力」、「省察する力」、これこそがこれからの教師が身に付けていかなければいけないコンピテンシーだし、それを子ども達にどう培っていくのか、そういう学びをどう作っていくかを教師は考えなければいけない。教科の専門性は当然のこととして、そんなことを今回の対談を通して改めて強く感じました。これから全国に向けて教師教育のカリキュラムを提案していく上での3本柱になると思います。

学ぶことの楽しさを実感していく学修

橋本：現役の院生のお二人は、今聞いていて思ったことはありますか？

三上：野尻先生のお話、自分の他に2人いると心強い、まさしくそうだと思います。僕、学部の時は一匹狼だった。みんな学習指導案さえできればいいという感じ、それを超えていかなきゃあかんと思ってても、一人だけでは苦しい。学部では、教科ごとに分かれていて、場所も違い、他教科の学びは全然伝わってこない。伝わっても数学(自分)と近い理科。だけど、ここではいろんな教科の人とカンファレンスをする。その時に思ったことは、いろんな教科の人と同じ「探究」という言葉がキーワード。それこそ同じ大橋先生に教わっていた僕と畑中君、川西君の3人が至民中出身で、同じ教師を目指して教科もバラバラでやっていて、だけど3人で話し合うことはいつも探究なんです。共通の授業を受けてきて語れるものがあり、広くいろんな教科の人と話すことで自分を問い直すことができる。大学院の意味を感じている。

橋本：じゃあ、今は心強いですね。他の院生の皆さんも、カンファレンスの中で良く理解者になっていっていると思いますよ。自信をもってくださいね。

荒木：先生方は、長い教員人生を歩まれて、たぶん教職大学院に入った当初の学校の様子と、今の学校の様子はたぶん違うのではないかなと思うんですけど、この教職大学院でやっていることはずっと変わらないんだなと思いました。ずっと大事にされていることは一緒で、大橋先生がおっしゃったように共通項が出てくるくらい、そのことが続いていることを今改めて実感した。川崎先生がおっしゃったように、使われている言葉は自分が大学で聞いてこなかった言葉ばかり、「ナラティブ」とか「省察」とか、大学ではこういうことは学ばなかったなと思う。それをここでは大事にしている。自分の大学はコンテンツを重視したところ、ここではコンピテンシーを培うことが目的で、目的が違うからでしょうけど、それで学ぶことや学び方も変わってくるのだと感じている。私はここの学びが楽しい。力ももっとつけていきたい。

これからの学びに向かって

橋本：後半になってきました。ぜひ言いたいと思うことがおありでしたら

野尻：8年前に尊敬していた女性の校長先生に教職大学院を勧められた。尊敬する方だったので断りきれなくて…最初はあまり行きたくなかったのだけれど(笑)。どうせ行くなら1年間きちっと学校を離れて行きたいなと思っていたんです。ただ来てみると、学校拠点方式の良さというのは自分がやってみて実感できたなと思います。

橋本：学校拠点の方がよかったです？

野尻：そうですね。探究・協働・省察と同じようによく教職大学院で使う言葉で「理論と実践の往還」という言葉がありますね。それができるのがすごく魅力だし、なぜこの方式が他の教職大学院に広がっていかないのかというのはありますよね。

大橋：他大学の先生にも言われた。学校拠点方式をやりたけれど、なかなか難しい。

橋本：なぜでしょうね。

大橋：大学の中でコンセンサスを得られない。やっぱりまだまだ大学院というのは現場を離れて、じっくり理論的なことをきちんと学ぶ。働きながら学ぶということがピンとこないということをおっしゃっていた。

橋本: そうなると、荒木さんだったら困ってしまうね。実践力を身に付けたいのよね。

川崎: 拠点校であっても連携校であっても自由に学校を見られたというのは良かったです。それまで私は、福大附属中にしても、「附属だから」と前置きをつけたり、至民中の教科センター方式やクラスターにしても、「至民は特別」って思ったりしていました。附属や至民にしかできないという目で見てしまったら、それで終わりですけど、自分に何か取り入れられるところはないかという視点を持つことは大切です。例えば、授業研究会の持ち方について、私は至民中の研究会を見て自分でもやってみようと思いました。

荒木さんから「楽しい」というお話がありました。県教委は、知的好奇心や探究心を持って、学びを自ら進んで「楽しむ教育」を進めています。もちろん主語は子どもですが、子どもが楽しむには、まずは教員が楽しむことが大切だと思います。荒木さん、三上さんには、いろいろな学校の実践を通して大学院での学びを楽しむとともに、子どもとの学びを楽しめる教員をめざしてほしいと思います。

橋本: まだ道半ばということですね。今後もみんなで考えて行けたらということで今日はこれで終わりたいと思います。貴重なお話、ありがとうございました。

(文責：連合教職大学院 宮下正史)

Schedule

夏の集中講座

サイクル1 a日程 7/22-24 b日程 7/25-27

サイクル2 a日程 7/29-31 b日程 8/1-3

サイクル3 a日程 8/7-9 b日程 8/20-22

10/16 Sat 10月合同カンファレンス（A日程） **10/23 Sat** 10月合同カンファレンス（B日程）

11/13 Sat 11月合同カンファレンス（A日程） **11/20 Sat** 11月合同カンファレンス（B日程）

【編集後記】学修がオンラインに切り替わって2年目を向かいました。この状況上で皆さんは新たな学びのプロセスを実現させようと工夫されていると実感しています。本号にはスタッフ、院生の自己紹介に加え、皆さんの各学校における実践やチャレンジ、お互いの学び合いを語る内容で充実しているものがたくさん寄せられました。ラウンドテーブルが終わってほっと一息ついておられるこの時期に、前期の前半と後半をつなぎ、夏期集中講座での学びに向けて気持ちを切り替える重要な接点として150号をお届けいたします。さらに、今号では150号が発刊されたことを記念して特別企画を投稿しました。ぜひお楽しみください。いつも皆さんにご協力いただき、深くて意義のある内容を寄せていただき、ありがとうございます。どうぞご自愛ながら、本号の内容をお楽しみください。（ニュースレター委員会）

教職大学院 Newsletter **No.150**

2021.7.3 内報版発行

2021.8.2 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dptfukui@yahoo.co.jp
